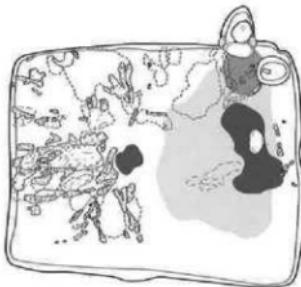


朝倉伊勢西 No.1 遺跡

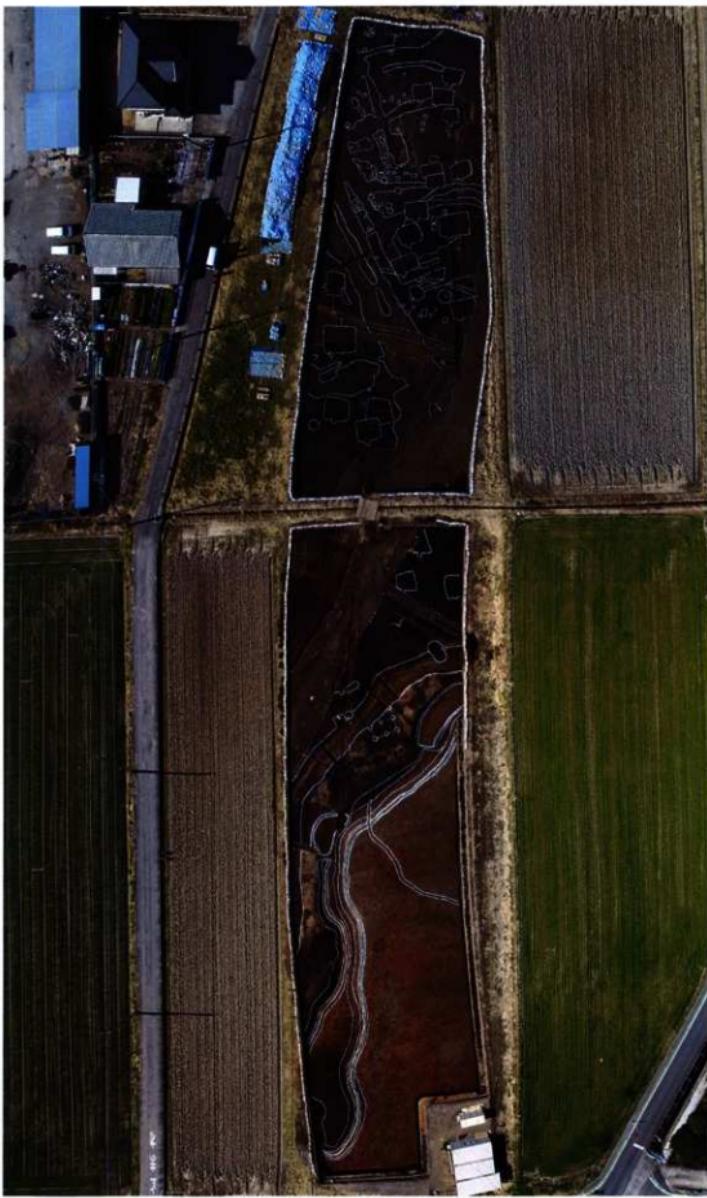
(都) 江田天川大島線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



多くの炭化材が見つかった
H-15号住居跡

2 0 1 1 . 1 0

前橋市教育委員会



調査区全景（上が西、撮影2回分を合成）



1区H-15炭化材検出状況（北西から）



2区近景（西から）

はじめに

前橋市は関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始めました。そのため市内のいたる所から、人々の息吹を感じることのできる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは總社・元總社地区に山干廢寺、国分僧寺、國分尼寺、国府など上野国の中核をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられる厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地であり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する朝倉伊勢西No.1遺跡は市の南東部に位置し、江田天川大鳥線道路改良工事に伴う発掘調査です。調査の結果、平安時代の集落跡をはじめ、堀や水路などの水利施設が発見されました。また、この水路と関連する水田跡も発見されており、前橋台地に広く展開する貴重な条里製造構の一部です。

残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、この調査事業を円滑に進められたのは、道路建設課をはじめ、技研および各方面のご配慮の結果といえます。また、寒風の中、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成23年10月

前橋市教育委員会
教育長 佐藤博之

例　　言

- 1 本報告書は都市計画道路江田大島線道路改良工事に伴う朝倉伊勢西 No. 1 遺跡発掘報告書である。
- 2 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡名	朝倉伊勢西 No. 1 遺跡
調査場所	前橋市朝倉町 147、159、160 番
遺跡コード	22 G 71
発掘・整理担当者	山田誠司（技研測量設計株式会社）
発掘調査期間	平成 22 年 12 月 24 日～平成 23 年 3 月 15 日
整理・報告書作成期間	平成 23 年 7 月 14 日～平成 23 年 10 月 31 日
- 3 本書の原稿執筆は 1 を福田貫之（前橋市教育委員会）、他を山田が担当した。
- 4 本書の編集は前田和昭（技研測量設計株式会社）が担当した。また、出土遺物の整理・分類作業は佐野良平（技研測量設計株式会社）が担当した。
- 5 発掘調査、及び整理作業参加者は次のとおりである。

大川明子 中村岳彦 丸山和浩 坂田裕之（以上、技研測量設計株式会社）
石川輝子 内鶴勝義 女屋みどり 木暮孝一 佐藤和彦 佐藤文江 箔藤香織 関山勝司 高橋一巳 薩摩住子
竹澤賢司 出部井美砂子 角田耕二 長岡 保 中嶋知恵子 長田友香 楠島裕子 三原一重 欠内朝夫
矢内司郎 欠内ヒロ子 湯浅准子
- 6 プラントオパールの分析はパリノ・サーヴェイ株式会社（管理・現地試料採取：千葉博俊 試料分析：馬場健司）に依頼した。
- 7 発掘調査で出土した遺物および図面等の資料は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管している。
- 8 下記の浦氏・諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。（順不同、敬称略）

山下工業株式会社

凡　　例

- 1 本遺跡におけるグリッドの座標値は、国家座標（座標第Ⅳ系：日本測地系）を基準として、任意グリッドを設定した。なお、図中の方位北は座標北を示す。
- 2 採図に付土地理院発行 1/200,000『宇都宮』・『長野』、1/25,000『前橋』、前橋市発行 1/2,500 都市計画図を使用した。
- 3 遺構名称は、堅穴住居跡：H、掘立柱建物跡：B、溝：W、土坑：D、ピット：P、その他：X である。
- 4 遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。それ以外のものについては図版下部にスケールを示した。

遺構 堅穴住居跡、掘立柱建物跡・溝、土坑、ピット、その他・・・1/60 窓・・・1/30 溝・・・1/100
全体図・・・1/200
- 5 各種計測値は、遺構に関するものは単位をメートル（m）、遺物に関するものは単位をセンチメートル（cm）とし、遺構の直後、削平等により不明な場合、または遺物の破損状況により不明な場合は残存値として（ ）を付していく。
- 6 遺構図、遺物実測図のトーン表現は以下の通りである。

遺構	焼土範囲：	■	灰範囲：	■	粘土範囲：	■		
遺物	須恵器（還元焰）：	■	灰釉陶器：	■	油焼・窯：	■	石器磨削：	■
- 7 遺物写真図版の倍率は基本的に 1 / 4 に近づけるようにし、大型の遺物は 1 / 6、小型の遺物は 1 / 1 に近づけるように撮影を行った。

8 Tab. 1・3に用いた道場の平面および断面形状の分類基準は以下のとおりである。

平面	分類	基準
	円形	直径が標準の1/2倍未満のもの。
	橢円形	直径が標準の1/2倍以上1.5倍未満のもの。
	長方形	長径が標準の1.5倍以上4倍のもの。
	正方形	長径が標準の1.5倍未満のもの。
	六角形	長径が標準の1.5倍以上のもの。
	不規則形	既往データ中の平面形状を持たないもの。

断面	分類	基準
	U字形	側面に半円形を持ち、底面より上がるもののもの。
	V字形	側面にU字形を持ち、底面より下がるもの。
	W字形	側面に半圆形を持たない複数のV字形に立ち上がるものの。
	Y字形	直角で平面を含む複数のV字形に、内側に向かって傾斜しているもの。
	複数V字形	複数のV字形を持ち、高い位置(アーチ)を持つもの。
	U字形底面斜面	側面がU字形の側面が斜面であるもの。
	V字形底面斜面	側面がV字形の側面が斜面であるもの。
	複数V字形底面斜面	側面が複数のV字形の側面が斜面であるもの。
	Y字形底面斜面	側面がY字形の側面が斜面であるもの。

〔在来八重山〕別冊地図収載地図調査委員会 2000,「新羽島村伊那瀬地区の資源団体 2007」,「土蔵山調査」,物語の歴史資源自白 2008年刊行。

9 本書における主な火山噴出物の表記は以下の略称を用いた。

- 浅間A軽石（As-A 軽石）－天明3年（1783）浅間山噴出による降下テフラ
- 浅間磐川テフラ（As-Kt）－大治3年（1128）浅間山噴出による降下テフラ
- 浅間B軽石（As-B 軽石）－天仁元年（1108）浅間山噴出による降下テフラ
- 榛名山二ッ岳伊香保テフラ（Hr-FP）－6世紀中葉の榛名山二ッ岳噴出による降下テフラ
- 榛名山二ッ岳浜川テフラ（Hr-FA）－6世紀初頭の榛名山二ッ岳噴出による降下テフラ
- 浅間C軽石（As-C 軽石）－3世紀後葉～4世紀初頭の浅間山噴出による降下テフラ

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、（株）江田天川大島線道路改良工事に伴い平成22年10月15・16日に実施した試掘調査の結果を踏まえ、同年11月12日付けで前橋市長高木政夫（道路建設課）より埋蔵文化財発掘調査業務依頼書が前橋市教育委員会に提出された。教育委員会では既に直営による発掘調査を実施しており、直営による調査の実施が困難であるため、民間調査組織に業務を委託するよう前橋市に回答をした。また、整理作業等については次年度に行なうよう前橋市に依頼した。民間調査組織の専門家等については、依頼者である前橋市の合意も得られ、市教委の作成する調査仕様書に基づく確認・指導の下、発掘調査を実施することになり、平成22年12月15日付けで前橋市と民間調査組織である技研測量設計株式会社 代表取締役社長 鳩田大和との間で発掘調査業務契約を締結し、同年12月24日から発掘調査を開始した。整理等作業は、平成23年7月14日付けで前橋市と発掘調査を実施した技研測量設計株式会社 代表取締役社長 鳩田大和との間で業務委託契約が締結され、市教委の仕様書に基づく確認・指導の下に同日から開始された。

なお、遺跡名稱「朝倉伊勢西No.1遺跡」（遺跡コード：22G71）の「朝倉」は町名、「伊勢西」は小字名、「No.1」は次年度に実施予定の調査と区別するために付したものである。

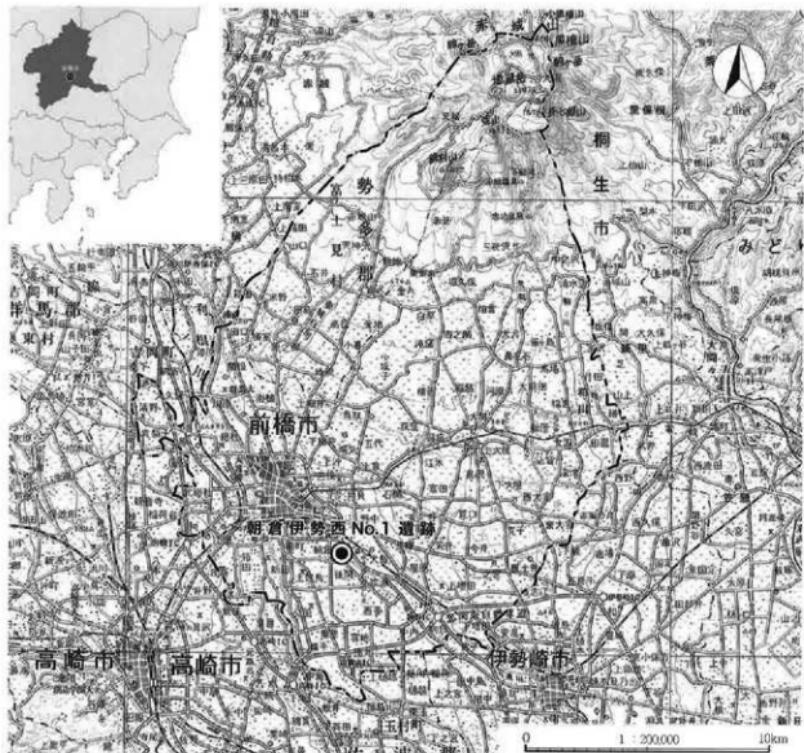


Fig.1 遺跡の位置

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置 (Fig. 1・2)

朝倉伊勢西No.1遺跡は群馬県前橋市朝倉町に所在し、前橋市市街地から南東へ約4kmに位置する。本遺跡は前橋台地東縁部を南流する広瀬川右岸から西に開けた低平な地に立地する。本遺跡周辺には利根川をはじめとして東に広瀬川、西に瑞氣川が流れ、これらの河川により形成された微高地に宅地が造られ、後背湿地は主に水田として利用されている。本遺跡周辺も、近年は宅地開発や幹線道路のインフラが進み、市内でも規模の大きな広瀬団地を中心とする市街化区域に変貌している。また、広瀬川左岸の低地帯についても主要地方道前橋館林線の沿線を中心に宅地化が進んでいる。

2 歴史的環境 (Fig. 3)

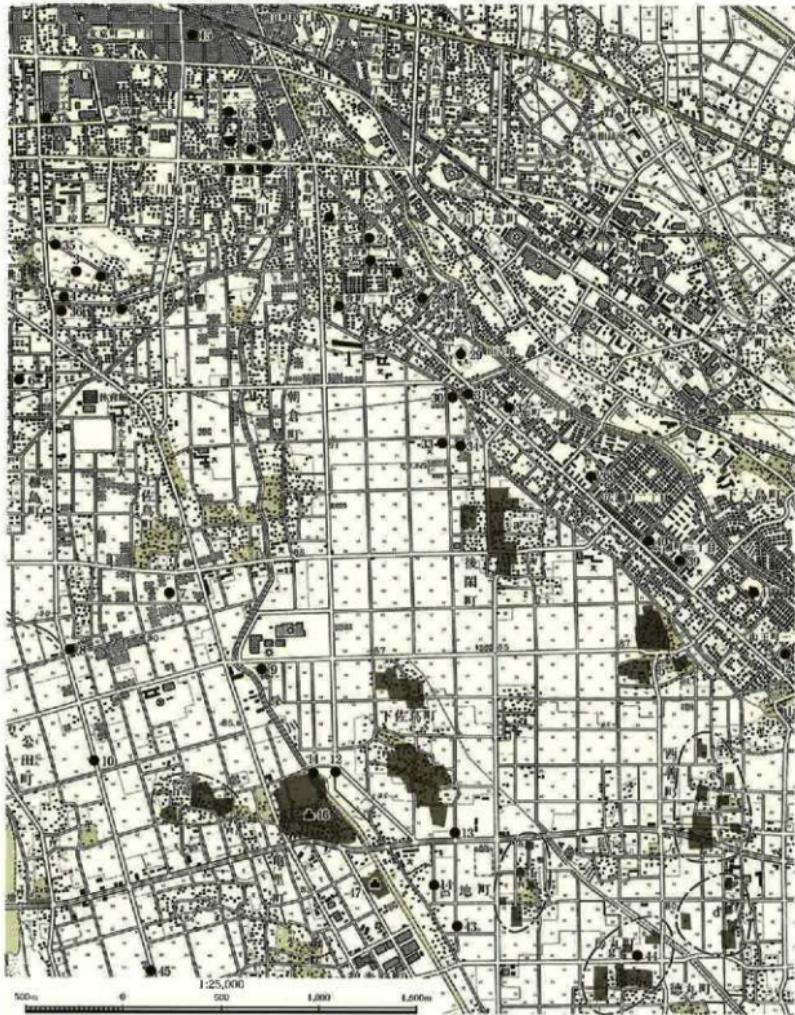
本遺跡周辺での縄文時代および弥生時代の遺跡は少ないが、利根川左岸の公田東遺跡(8)に隣接する櫛鳥川塚遺跡では縄文時代草創期後半の「撫糸式土器」、弥生時代中期の再葬墓と後期の堅穴住居跡5軒が検出されている。また、生産関連では隣接する高崎市の日高遺跡等でAs-C軽石下の水田が検出されている。

古墳時代に入ると遺跡数は急増し、住居関連では前期の六供堂木II遺跡(3)、六供中京安寺遺跡(35)、公田池尻遺跡(10)が、中期の集落跡としては六供中京安寺遺跡の西に位置する六供遺跡群No.5で確認されている。後期には公田池尻遺跡、下佐鳥遺跡(9)、曲曲遺跡(12)、坊山遺跡(31)、後閉II遺跡(34)等で住居跡が見つかっているが、公田池尻遺跡のように前期から継続的に営まれる集落が存在する一方、この時期から新たに集落が展開する遺跡も多い。また、生産関連では公田池尻遺跡、公田東遺跡においてAs-C軽石混入土を耕作する水田跡が確認されている。

本遺跡周辺では古墳が多く分布し、広瀬川右岸の自然堤防上には旧市域から旧上陽村の東善にかけて帶状に連なる、広瀬・朝倉古墳群を形成する。『上毛古墳綜覧』によると分布調査を実施した昭和10年には151基の古墳が確認されたが、大半が未調査のまま削平され、当時の姿形を残すものは少ない。時期別に概観すると、前期には4世紀後半に東国最大級の全長約130mの規模を誇る前方後方墳である八幡山古墳(29)や、三角縁神獣鏡を含む5面の青銅鏡や底部穿孔布型土器が出土した4世紀後半の前方後円墳である前橋天神山古墳(32)等が築造され、前橋台地上に最初に誕生した地域首長墓の1つと見られている。中期には古墳の築造数が少くなり、小型化していく傾向が看取でき、前橋台地東半の地域から首長墓と目される古墳は見られなくなる。かわって前橋台地西南の高崎市今賀野地域に毛野最大の前方後円墳である浅間山古墳や大鷲巻古墳が5世紀前半に、東毛には5世紀中葉以降に東日本最大の前方後円墳である太田天神山古墳や宝泉茶臼山古墳が築造され、勢力の移動を窺わせる。後期には再び前橋台地での古墳築造が活発化し、本遺跡周辺でも6世紀前半に龜塚山古墳(41)、帆立貝式古墳(42)や、6世紀後半には新羅文化の影響とされる金銅製立花型冠を中心に大壇・衝角付



Fig. 2 前橋の地形



1. 朝倉伊勢西側1道路
2. 六条通跡
3. 六條上堂木立道跡
4. 六條下堂木立道跡
5. 六條下木立道跡
6. 東京安寺道跡
7. 上佐馬中郷高瀬路
8. 公山高瀬路
9. 下佐馬高瀬路
10. 公園池尻道跡
11. 新内院内通
12. 川造跡
13. 東山造跡
14. 宮東中田造跡
15. 不二山古墳I・II
16. 寺崎造跡
17. 星之宇曾頃造跡
18. 霧崎二丁山古墳
19. 二子山南面古墳
20. 二子山南面古墳
21. 二子山南面古墳
22. 二子山前且造跡
23. 小丘郡武津
24. 切谷2号墳
25. 桂山古墳
26. 胡白1号墳
27. 鹿門裏弓築
28. 朝倉3号墳
29. 八幡山古墳
30. 稲垣御敷君跡
31. 勝山古墳
32. 西嶽天神山古墳
33. 修善造跡
34. 陰陽真造跡
35. 六條下堂安寺高瀬路
36. 六條下堂木立道跡
37. 文之町1号跡
38. 丸太神社前古墳
39. 庄和木ノ宮古墳
40. 上用賀高瀬路
41. 鹿塚山古墳
42. 金冠塚古墳
43. 宮津少山古墳
44. 於光松原古墳
45. 丸東平塚古墳
46. 滝阿内古墳
- a. 佐隅原高瀬路
- b. 山王組塚古墳
- c. 南吉野塚古墳
- d. 旧西宮塚古墳
- e. 下吉烏塚古墳
- f. 東吉烏塚古墳
- g. 旧丸塚古墳
- h. 龟甲塚古墳

Fig. 3 周辺遺跡図

胄・金銅製太刀等が出土した前方後円墳の金冠塚古墳（42）、墳丘長104m・後円部径72mを測る前方後円墳の前橋二子山古墳（18）等が発見され、本遺跡周辺が古墳時代を通して継続的に発展していたことを窺わせる。

奈良・平安時代になると前檻台地上でも条里地割に基づく農地開発が進み、現在も本遺跡から南に広がる水田地帯には条里地割の痕跡が明確に認められる。特に、天仁元年（1108）の浅間山の噴火に伴うAs-B軽石によって埋没した水田跡が各地で確認されており、本遺跡周辺でも条里地割の推定が行なわれている。なかでも宮地中田遺跡ではAs-B軽石層下より平安時代後期の水田跡が92枚検出され、東西3本、南北1本の坪境畦畔によって方形区画の条里水田跡が確認された。これは高崎東部・北部で確認された条里制水田跡が利根川を挟み、前橋南部まで及んでいたことを示している。

中世になると、本遺跡周辺地域には100を超える数の環濠遺構群が展開する。本遺跡から南に広がる標高地上にも環濠遺構群（a～h）が多く確認されるようになり、城館跡では宿阿内城（46）・阿内古城（47）等が知られるようになる。

III 調査の方針と経過

1 調査範囲と基本方針 (Fig. 3・4・6～11)

委託調査箇所は、（都）江田川大島線道路改良工事の予定地であり、調査面積は1区1,600m²、2区1,900m²で、総調査面積は3,500m²である。グリッド座標については国家座標（日本測地系第IX系）X = 40800.000、Y = - 66200.000を基点とする4mピッチのものを使用し、経線をX、緯線をYとして北西隅を基点に番付して呼称とした。各調査区の公共座標は次のとおりである。

測点	日本測地系（第IX系）	世界測地系（第IX系）
1区 X 22, Y 32	X = 40672.000 m, Y = - 66112.000 m	X = 41026.926 m, Y = - 66403.867 m
2区 X 41, Y 32	X = 40672.000 m, Y = - 66036.000 m	X = 41026.924 m, Y = - 66327.869 m

発掘調査は遺構確認面まで重機（0.45バックホー）にて表土削除を行ない、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、測量、写真撮影の手順で実施した。遺構調査については土層の堆積状況を確認するため、上層ベルトを適宜設定した。なお、住居跡の遺物に関しては、床面直上や遺構に伴うと判断したものはNo遺物とし、他の覆土中の破片等については一括遺物として取り上げた。

遺構の記録には、図面作成はトータルステーション・電子平板を用いての測量・編集を行ない、断面図については一部オルソフォトに変換して編集を行なった。記録写真は35mmモノクロ・リバーサル、デジタルカメラの3種類を用いて撮影し、調査区全景撮影についてはラジコンヘリコプターによる空中撮影を調査工程上から1区・2区の順に、2回実施した。また、2区東側の低地部ではAs-B軽石下の土壤環境・性質を把握するため、自然科学分析も行なっている（VI 自然科学分析）。

2 調査経過 (Fig. 4)

本遺跡の発掘調査は廃土置場の関係から1区・2区での折り返し調査とし、平成22年12月24日に1区の表土削除より開始し、翌平成23年1月5日から遺構確認作業を実施した。以降、順次調査を進め、2月10日に1区の全景撮影を行ない、2月18日より1区の埋め戻しと併行して2区の表土削除を開始した。2区は3月11日に全景撮影を実施、3月14～15日に埋め戻しを行ない、現地での調査を終了した。なお、2区の全景撮影を実施した3月11日は、東日本に甚大な被害をもたらすこととなる【東日本大震災（東北地方太平洋沖地震）】の発生日である。幸いにも本調査には大きな支障はなかったが、日常の安全対策についての重要性を改めて考えさせられるものとなった。

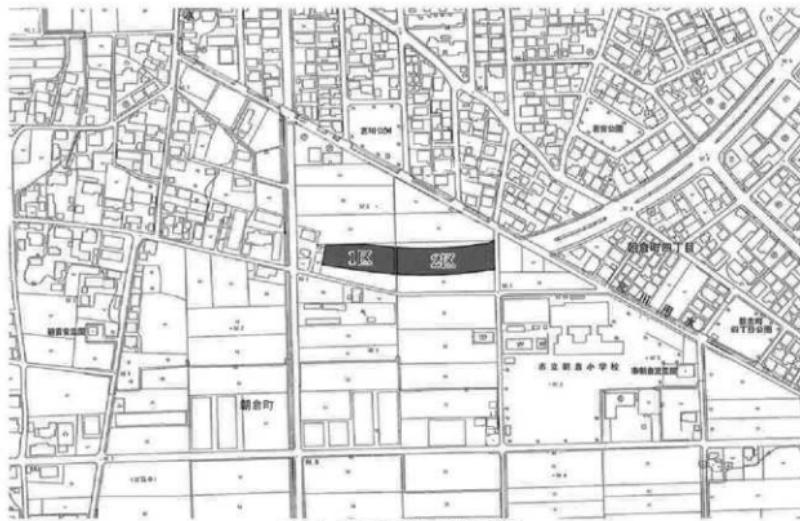


Fig. 4 調査区位置図 ($S=1:5,000$)

IV 基本層序

1区はIV層およびV層上面が遺構確認面となる(Fig. 5)。2区は調査区中央付近を境として標高91.5 m前後の微高地(西側)と、標高90.6 m前後の低地部(東側)に分かれるため、それぞれ調査区西端と東端の2箇所で基本層序の確認を行なった。微高地はII層上面を遺構確認面とし、低地部は全面に亘りAs-Kk・As-B軽石の良好な堆積が見られ、As-B軽石を除去した面であるⅥ層上面を遺構確認面とした。

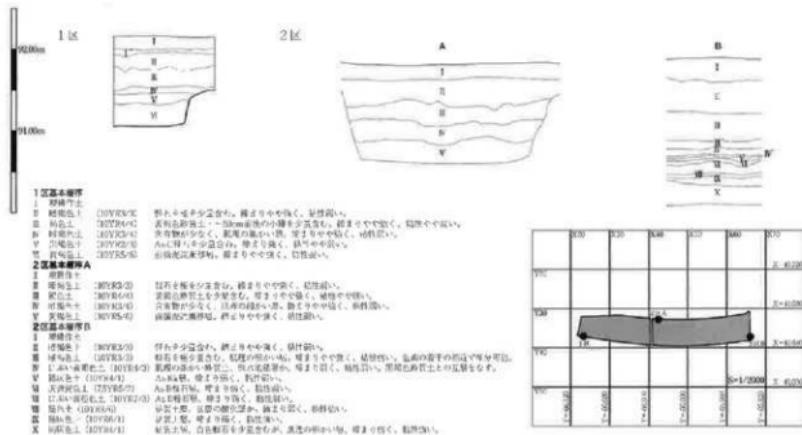


Fig. 5 基本層序

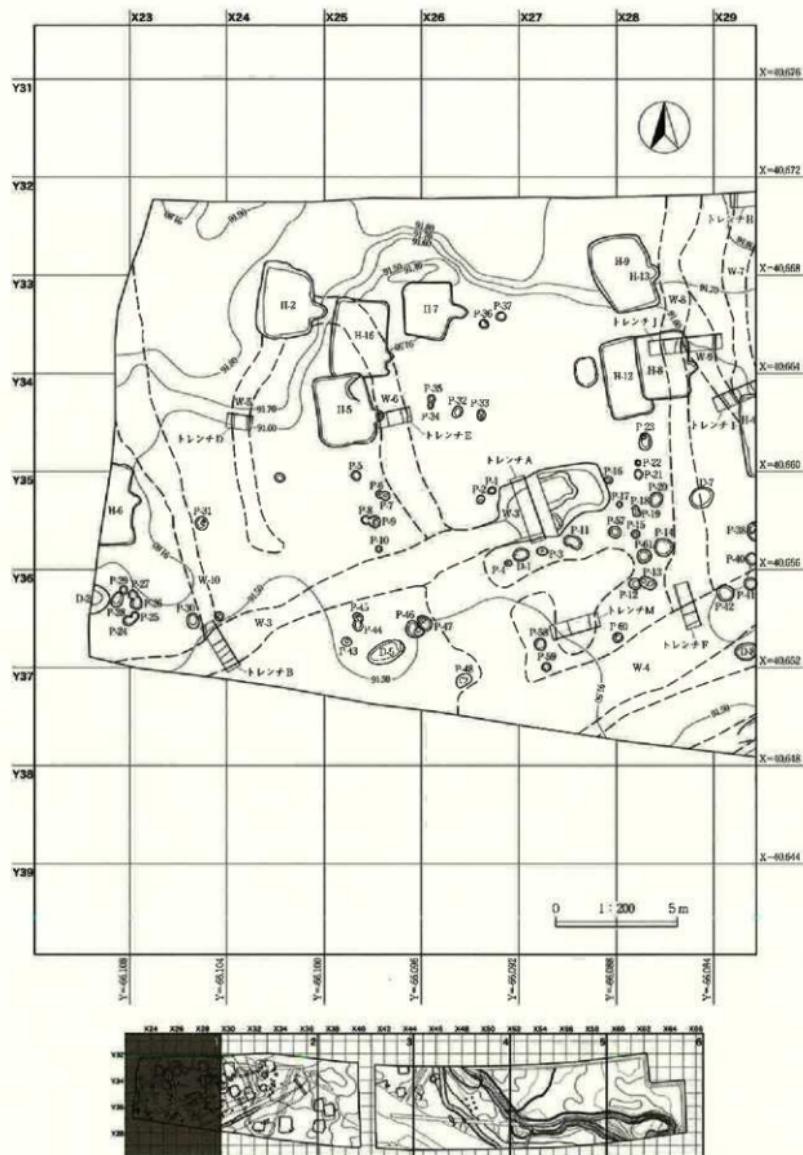


Fig.6 調査区全体図 (1)

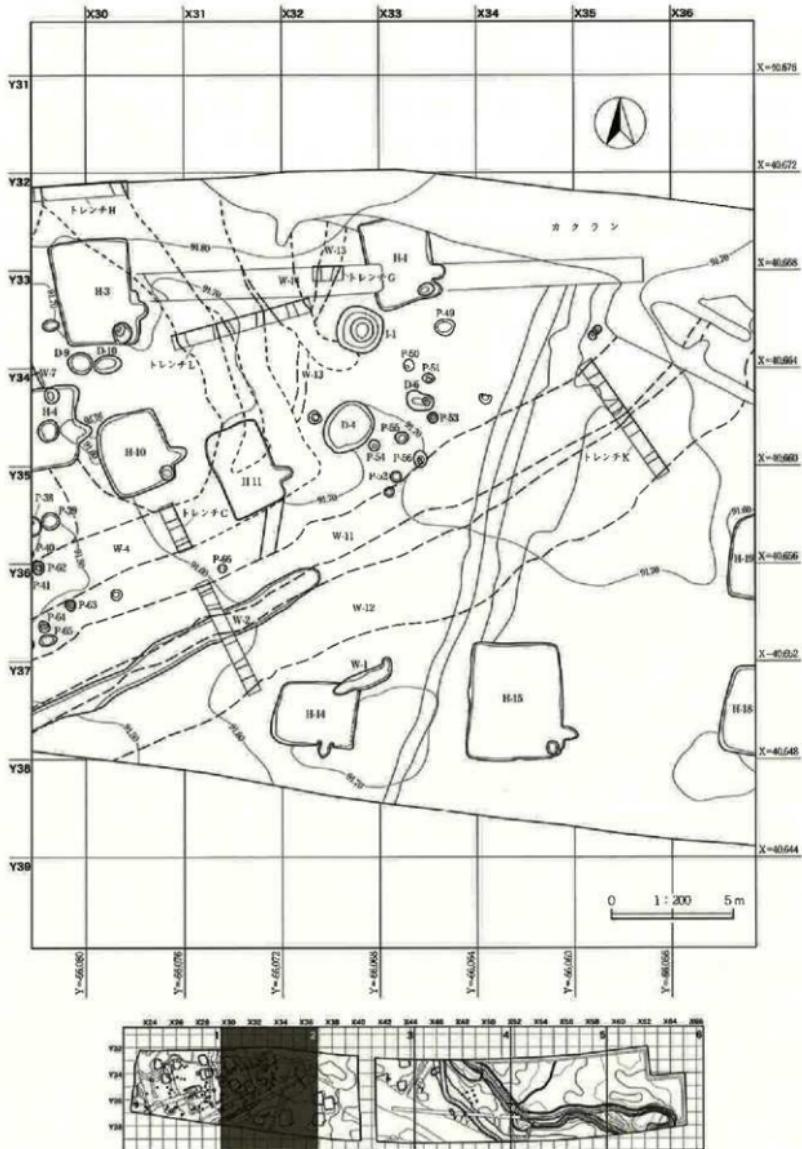


Fig. 7 調査区全体図 (2)

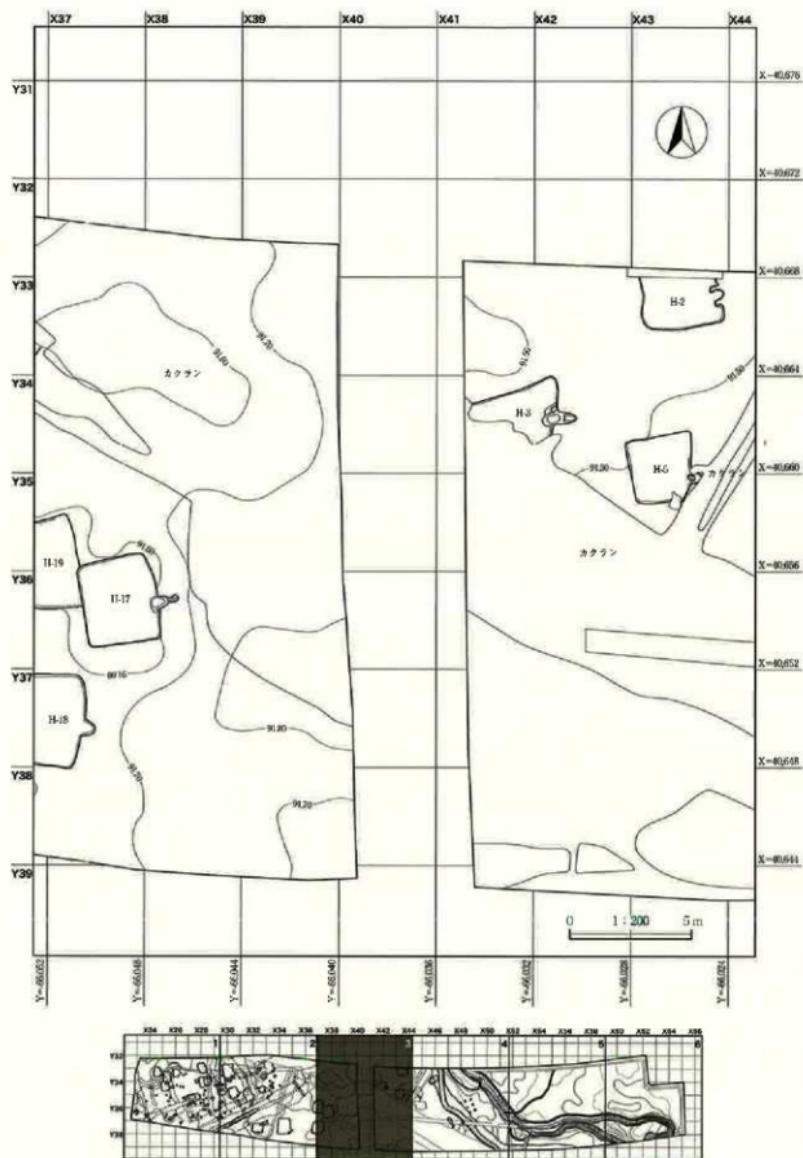


Fig. 8 調査区全体図 (3)

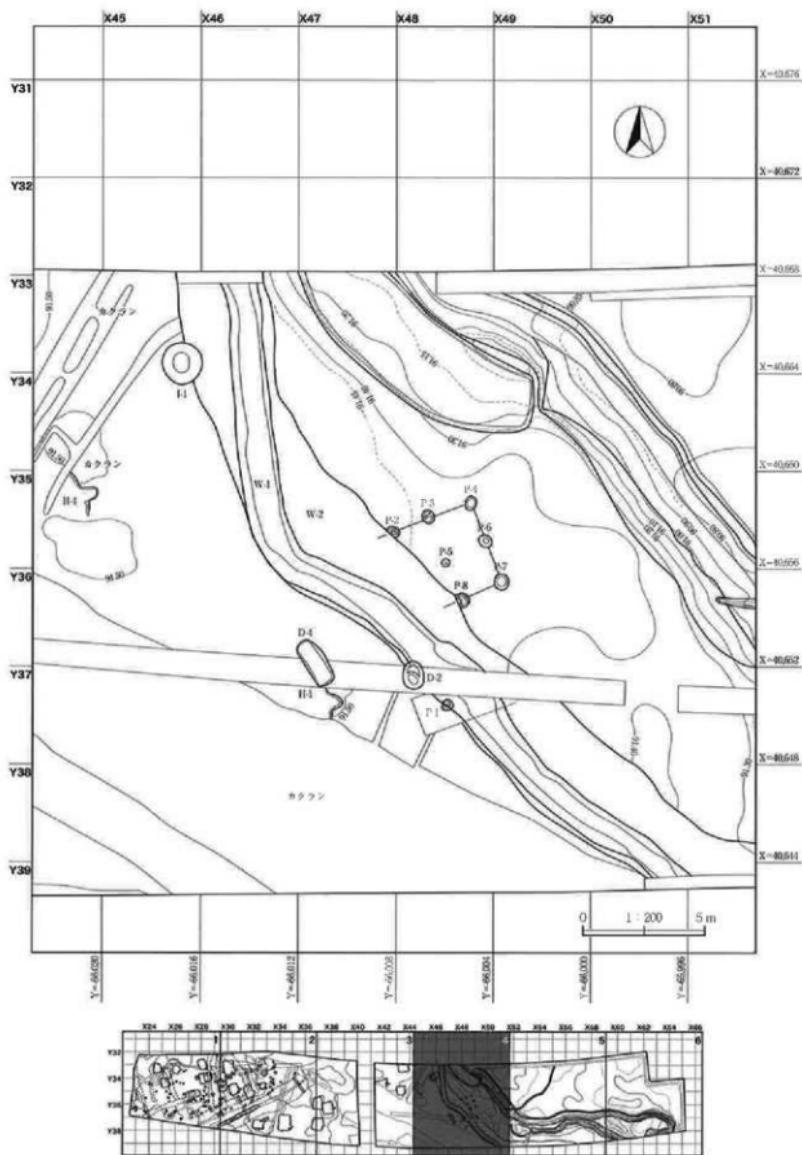


Fig. 9 調査区全体図 (4)



Fig.10 調査区全体図 (5)

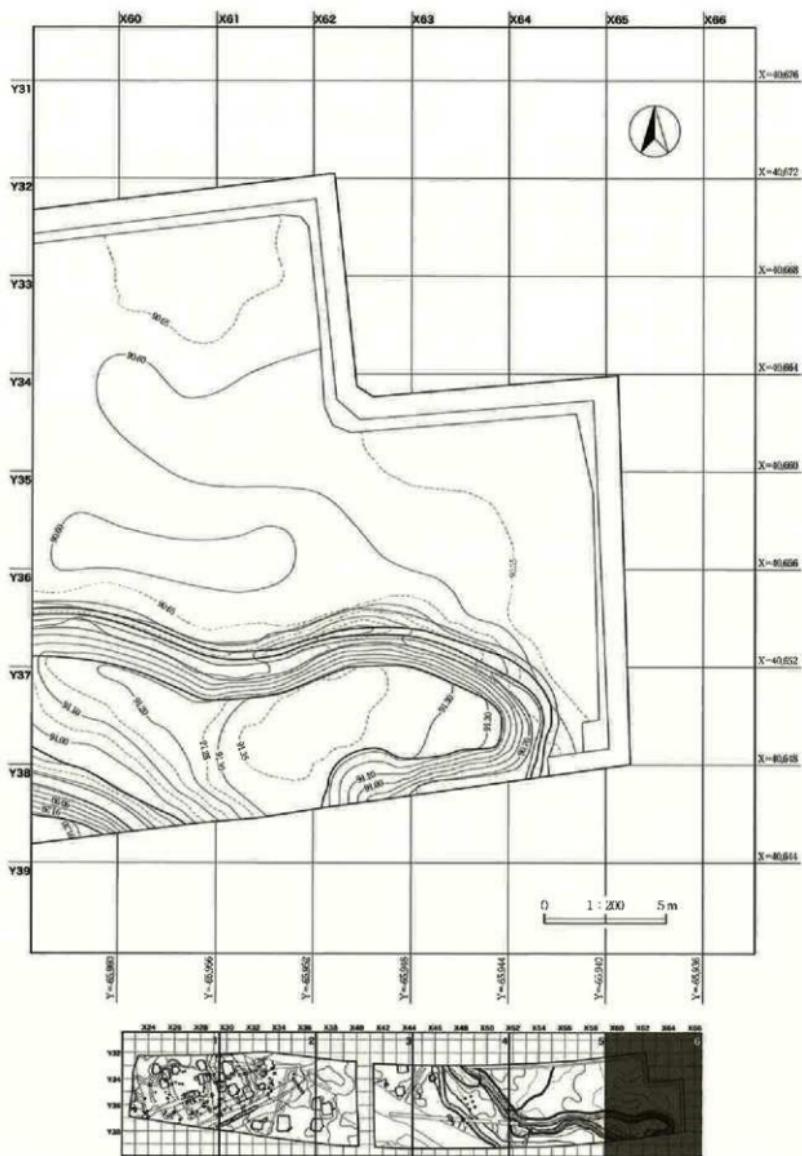


Fig.11 满奇区全体図 (6)

V 遺構と遺物

1 1 区

(1) 壁穴住居跡

H-1号住居跡 (Fig.12・28、PL 1・9)

位置 X 32・33、Y 32・33 主軸方向 N-77°-E 規模 東西軸 2.70 m、南北軸 3.67 m、現壁高 0.16 m。北側は擾乱により削られる。面積 (7.58) m² 床面 ほぼ平坦で、暗褐色・黄褐色土による貼り床。竈周辺の硬化が顕著。竈 東壁の南寄りに位置する。確認長 0.58 m、燃焼部 0.53 m を測る。燃焼部に支脚石が残存する。貯蔵穴 南東隅に位置する。東西 0.66 m、南北 0.48 m、深さ 0.23 m を測り、楕円形を呈する。出土遺物 須恵器高台付塊 (1～7)、土師器甕 (8)、羽釜 (9) を図示。時期 出土遺物の傾向から9世紀後半～10世紀前半と想定される。

H-2号住居跡 (Fig.12・13・28、PL 1・9)

位置 X 24・25、Y 33・34 主軸方向 N-95°-E 規模 東西軸 2.26 m、南北軸 3.09 m、現壁高 0.34 m。面積 4.74 m² 床面 ほぼ平坦で、暗褐色粘質土による貼り床を施す。竈周辺の硬化が顕著で、住居中央まで硬化が認められる。竈 東壁のやや南寄りに位置する。確認長 0.71 m、燃焼部 0.49 m を測る。重複 W-5・6と重複し、新旧関係はW-5・6→木造構である。出土遺物 床面直上から出土した須恵器甕2点 (1・3) と、覆土から出土した須恵器甕1点 (2) を図示。時期 出土遺物の傾向から9世紀後半と想定される。

H-3号住居跡 (Fig.13・14・28・29、PL 1・9)

位置 X 29・30、Y 32・33 主軸方向 N-83°-E 規模 東西軸 3.26 m、南北軸 4.29 m、現壁高 0.29 m。面積 11.5 m² 床面 ほぼ平坦で、暗褐色土による貼り床を施す。竈 東壁の南寄りに位置する。確認長 0.63 m、燃焼部 0.48 m を測る。貯蔵穴 南東隅に位置する。東西 0.76 m、南北 0.81 m、深さ 0.37 m を測り、円形を呈する。南側の立ち上がりは住居南壁と共有する。重複 W-4と重複し、新旧関係はW-4→木造構である。出土遺物 須恵器高台付塊 (1～4)、土師器甕 (5～7) の7点を図示。(3)の高台塊は口縁部下に焼成前穿孔が施されるが、残存する穿孔は1箇所のみで全体的な形態は不明である。甕はいずれも口縁部が「コ」の字状を呈するが、口縁形態は崩れ形態は粗雑で器壁もやや厚くなっている。時期 出土遺物の傾向から9世紀後半と想定される。

H-4号住居跡 (Fig.14・15・29、PL 1・9)

位置 X 29・30、Y 34・35 主軸方向 N-84°-E 規模 東西軸 2.48 m、南北軸 3.31 m、現壁高 0.18 m。面積 6.93 m² 床面 ほぼ平坦で、暗褐色土による貼り床を施す。竈前面より住居中央部にかけて顕著な硬化面が認められる。竈 東壁のやや南寄りに位置する。確認長 0.63 m、燃焼部 0.39 m を測る。重複 W-7・9と重複し、新旧関係はW-7→W-9→木造構である。出土遺物 須恵器高台付塊 (1)、土師器甕 (2)、土師器甕 (4)、甕 (5) の4点を図示。時期 出土遺物の傾向から9世紀後半～10世紀前半と想定される。

H-5号住居跡 (Fig.15・29、PL 2・9)

位置 X 24・25、Y 34 主軸方向 N-82°-E 規模 東西軸 3.26 m、南北軸 4.29 m、現壁高 0.13 m。面積 5.57 m² 床面 暗褐色土を中心とする貼り床を施し全面的に平坦であるが、住居北東隅に限らず黄褐色粘質土を土盛状に貼り付ける。竈を中心として、住居南側の広範で顕著な硬化が認められる。竈 東壁の南寄りに位

置する。確認長 0.98 m、燃焼部 0.55 m を測り、両袖部に凝灰質砂岩を置く。支脚石は袖石と同じく凝灰質砂岩であるが、被熱のため赤変し、非常に黒くなっている。また、かき出した灰・炭化物が竈前面部を中心に広範囲に確認された。重複 H-16 および W-6 と重複し、新旧関係は W-6 → 本造構 → H-16 である。出土遺物 須恵器高台付塊（1）、土師器壺（2・3）、敲き石（4）。時期 出土遺物の傾向から 9世紀後半と想定される。

H-6号住居跡 (Fig.16・30, PL 2・9・10)

位置 X 22・23, Y 34・35 主軸方向 N-84°-E 規模 東西軸 2.39 m、南北軸 5.50 m、現壁高 0.06 m。面積 (3.46) m² 住居西半は調査区外となる。床面 ほぼ平坦で、暗褐色土による貼床を施す。H-5号住居跡と同様な黄褐色粘質土による貼り床も一部に認められる。竈前面を中心として、やや強い硬化が見られる。竈 東壁の中央に位置する。確認長 0.81 m、燃焼部 0.70 m を測る。残存状態が悪く、上部はほぼ削平されていると思われる。袖の痕跡も確認できなかった。出土遺物 須恵器壺（1）、須恵器壺（2～5）を図示。須恵器壺は覆土中、その他は床面直上からの出土である。時期 出土遺物の傾向から 9世紀中頃～後半と想定される。

H-7号住居跡 (Fig.16・30, PL 2・10)

位置 X 25・26, Y 30 主軸方向 N-90°-E 規模 東西軸 3.34 m、南北軸 3.83 m、現壁高 0.09 m。面積 3.93 m² 床面 ほぼ平坦な地山床。ほぼ全面に亘り、やや強い硬化が見られる。竈 東壁の南寄りに位置する。確認長 1.28 m、燃焼部 0.71 m を測る。凝灰質砂岩を支脚石として据える。出土遺物 いずれも床面直上から出土した須恵器壺 2点（1・2）、土師器壺 1点（3）を図示。時期 出土遺物の傾向から 9世紀後半～10世紀前半と想定される。

H-8号住居跡 (Fig.17・30, PL 2・10)

位置 X 28, Y 33・34 主軸方向 N-82°-E 規模 東西軸 2.21 m、南北軸 2.73 m、現壁高 0.07 m。面積 4.91 m² 床面 ほぼ平坦な地山床で、床面のほぼ全面に強い硬化が認められる。竈 東壁の中央に位置する。確認長 0.41 m、燃焼部 0.34 m を測る。重複 W-8・9 と重複し、新旧関係は W-9 → W-8 → 本造構である。出土遺物 図示し得た出土遺物は須恵器高台付塊 1点のみである。時期 出土遺物の傾向から 10世紀中頃と想定される。

H-9号住居跡 (Fig.17・30, PL 3・10)

位置 X 27・28, Y 32・33 主軸方向 N-71°-E 規模 東西軸 2.41 m、南北軸 3.18 m、現壁高 0.26 m。面積 (5.67) m² 床面 ほぼ平坦な地山床。竈 確認できず。重複 H-13 と重複し、新旧関係は本造構 → H-13 である。出土遺物 須恵器壺（1）、土師器壺（2）それぞれ 1点ずつを図示。時期 出土遺物の傾向から 9世紀後半～10世紀前半と想定される。備考 住居跡としているが、今回の調査では竈の確認に至らなかった。H-13 により削平されたことも考えられるが、床面に硬化面や灰・焼土等の竈の痕跡が見られないことから、住居ではなく竪穴状造構となる可能性も高いと思われる。

H-10号住居跡 (Fig.18・30, PL 3・10)

位置 X 30・31, Y 34・35 主軸方向 N-71°-E 規模 東西軸 2.83 m、南北軸 3.34 m、現壁高 0.22 m。面積 7.01 m² 床面 ほぼ平坦で、暗褐色土による貼床を施す。竈焼口部を中心に強い硬化が認められる。

竈 東壁の南寄りに位置する。確認長0.68m、燃焼部0.38mを測る。 貯蔵穴 南東隅に位置する。東西0.53m、南北0.61m、深さ0.58mを測り、円形を呈する。南側の立ち上がりは住居南壁と共有する。 出土遺物 いずれも床面直上から出土した羽釜(1)、土師器壺(2)の2点を図示。 時期 出土遺物の傾向から10世紀前半と想定される。

H-11号住居跡 (Fig.19・31, PL 3・10)

位置 X 31・32, Y 34・35 主軸方向 N - 68° - E 規模 東西軸2.38m、南北軸3.60m、現壁高0.04m。

面積 7.84 m² 床面 ほぼ平坦で、暗褐色土による貼床を施す。竈焚口前面には灰・焼土が散在し、硬化も強くなっている。 竈 東壁の南寄りに位置する。確認長0.68m、燃焼部0.37mを測る。 重複 W-4と重複し、新旧関係はW-4→本遺構である。 出土遺物 床面直上から出土した須恵器高台付壺(1)、竈から出土した須恵器壺(2)の2点を図示。 時期 出土遺物の傾向から10世紀後半～11世紀前半と想定される。

H-12号住居跡 (Fig.17, PL 2)

位置 X 27・28, Y 33・34 主軸方向 N - 79° - E 規模 東西軸1.81m、南北軸3.24m、現壁高0.03m。

面積 (4.26) m² 床面 ほぼ平凹な地山床。 竈 H-8により削平される。 重複 H-8と重複し、新旧関係は本遺構→H-8である。 出土遺物 出土遺物は須恵器壺2点、羽釜1点等であるが小破片であり、図示し得た遺物はない。 時期 出土遺物および重複関係から10世紀前半～中頃と想定される。

H-13号住居跡 (Fig.17・18・31, PL 3・10)

位置 X 28, Y 32・33 主軸方向 N 77° - E 規模 削平により、竈のみの残存。 竈 確認長0.63m、燃焼部0.42mを測る。 重複 H-9と重複し、新旧関係はH-9→本遺構である。 出土遺物 須恵器壺、土師器壺、羽釜等が出土しており、図示し得た出土遺物は須恵器高台付壺1点のみである。 時期 出土遺物および重複関係から10世紀前半と想定される。

H-14号住居跡 (Fig.19・31, PL 3・10)

位置 X 31・32, Y 37 主軸方向 N - 175° - E 規模 東西軸2.62m、南北軸3.44m、現壁高0.15m。

面積 (7.22) m² 床面 ほぼ平坦で、暗褐色土による貼床を施す。竈前面に灰・焼土の散布、強い硬化を認められる。 竈 南端の東寄りに位置する。確認長0.70m、燃焼部0.30mを測る。 重複 W-1と重複し、新旧関係は本遺構→W-1である。 出土遺物 須恵器短頸壺(1)、かわらけ(2)の2点を図示。 時期 出土遺物の傾向から11世紀前半と想定される。

H-15号住居跡 (Fig.20・31, PL 4・10)

位置 X 33・34・35, Y 36・37 主軸方向 N - 92° - E 規模 東西軸3.88m、南北軸4.82m、現壁高0.22m。

面積 16.57 m² 床面 ほぼ平坦で、暗褐色土による貼床を施す。竈前面を中心とし、住居南半で顕著な硬化が見られる。 竈 東壁の南寄りに位置する。確認長0.70m、燃焼部0.41mを測る。両袖に凝灰質砂岩と思われる袖石を配し、同質の石材の大井石を架ける。また、竈に掛けられた状態の土釜を検出している。 貯蔵穴 南東隅に位置する。東西0.47m、南北0.55m、深さ0.17mを測り、横円形を呈する。 出土遺物 灰釉陶器壺(1)、須恵器高台付壺(2)、土師器壺(3)、羽釜(4)、土釜(5)の5点を図示。 時期 出土遺物の傾向から10世紀後半～11世紀前半と想定される。 備考 床面直上に大量の炭化材および焼土塊を検出し、いわゆる「焼失住居」と考えられる。炭化材の残存状況は極めて良好である。

H-16号住居跡 (Fig.21・31, PL 4・10)

位置 X 25、Y 33・34 主軸方向 N - 93° - E 規模 東西軸 2.33 m、南北軸 3.15 m、現壁高 0.15 m。面積 (6.46) m² 床面 ほぼ平坦で、暗褐色土による貼床を施す。竈前面から住居中央にかけて、やや強く硬化する。竈 東壁の南寄りに位置する。確認長 0.32 m、燃焼部 0.28 m を測る。重複 H-5、W-6 と重複し、新旧関係は W-6 → H-5 → 本遺構である。出土遺物 灰陶器皿 (1)、須恵器坏 (2)、土師器坏 (3・4) の4点を図示。時期 出土遺物の傾向から 11世紀前半と想定される。

H-17号住居跡 (Fig.21・31, PL 4・10)

位置 X 37・38、Y 35・36 主軸方向 N - 80° - E 規模 東西軸 3.13 m、南北軸 3.55 m、現壁高 0.12 m。面積 9.86 m² 床面 ほぼ平坦で、暗褐色土による貼床を施す。竈前面部を中心として硬化が顕著である。竈 東壁の中央に位置する。確認長 0.94 m、燃焼部 0.33 m を測る。やや窪みをもった燃焼部から、細長く伸びた煙道に向かって立ち上がる。袖石に藤灰質砂岩を用いる。煙道先端には、煙突として軸用したと考えられる円筒埴輪を検出した。重複 H-19 と重複し、新旧関係は H-19 → 本遺構である。出土遺物 住居跡からは須恵器小破片、土師器小破片等を検出しているが、図示し得なかつた。図示したのは竈の煙突として軸用していた円筒埴輪で、直接的に本遺構の年代を決定する遺物ではないが、特徴的な遺物であるため掲載しておく。時期 出土遺物および重複関係から 10世紀前半～中頃と想定される。

H-18号住居跡 (Fig.22, PL 5)

位置 X 36・37、Y 37 主軸方向 N - 97° - E 規模 東西軸 3.40 m、南北軸 3.73 m、現壁高 0.26 m。面積 10.72 m² 床面 ほぼ平坦で、全面的に暗褐色土による貼床であるが、北西の一部のみ地山床である。竈前面部を中心に灰・焼土の散在、やや強い床面の硬化を確認した。竈 東壁の中央に位置する。確認長 0.61 m、燃焼部 0.38 m を測る。出土遺物 須恵器小破片、土師器小破片、羽釜片を検出しているが図示し得なかつた。時期 出土遺物の傾向から 10世紀前半と想定される。

H-19号住居跡 (Fig.23・31, PL 5・10)

位置 X 36・37、Y 35・36 主軸方向 N - 78° - E 規模 東西軸 2.86 m、南北軸 3.67 m、現壁高 0.07 m。面積 (8.98) m² 床面 ほぼ平坦で、暗褐色土による貼床を施す。竈 不明。II-17により削平される。重複 II-17 と重複し、新旧関係は本遺構 → H-17 である。出土遺物 羽釜 1点を図示。時期 出土遺物の傾向から 10世紀と想定される。備考 H-15 と同様に「焼火住居」と考えられる。

(2) 溝

W-1号溝 (Fig.23)

位置 X 32・33、Y 37 主軸方向 N - 68° - E 規模 長さ 2.62 m、上幅 0.71 m、下幅 0.52 m、深さ 0.21 m。形状等 北東から南西に走行し、断面は U字形に近い台形状を呈する。底面は比較的平坦である。重複 H-14 と重複し、新旧関係は H-14 → 本遺構である。出土遺物 須恵器・土師器が出土しているが、小破片のため図示には至らず。時期 出土遺物および重複関係から 11世紀代と想定される。

W-2号溝 (Fig.23)

位置 X 29～32、Y 36・37 主軸方向 N - 62° - E 規模 長さ 14.16 m、上幅 1.22 m、下幅 0.96 m、深さ

0.19 m。 形状等 北東から南西に走行し、断面はU字形を呈するが、後世の削平のためか概して浅い掘り込みとなっている。 重複 W-11・12と重複し、新旧関係はW-11・12→本造構である。 出土遺物 覆土中より須恵器・灰釉陶器が出上しているが、小破片のため図示し得なかった。 時期 重複関係および覆土から10世紀代と想定される。

W-3号溝 (Fig.24, PL 5)

位置 X 23～27, Y 35～37 主軸方向 N-68°-E 規模 長さ (21.50) m、上幅 1.47 m、下幅 0.58 m、深さ 0.49 m。 形状等 北東から南西に走行し、断面は台字形を呈する。北側に中段を有する。 出土遺物 須恵器・土師器が出土しているが、小破片のため図示には至らず。 時期 出土遺物および重複関係から9世紀以前と想定される。 備考 北東端は平面が長方形状の掘り込みとなっており、溜め井的な機能を持っていた可能性も考えられる。断面観察から、埋没時期は同時であり重複関係は認められない。

W-4号溝 (Fig.24・31・32, PL11)

位置 X 26～32, Y 32～37 主軸方向 南北方向N-24°-W、東西方向N-64°-W 規模 長さ (40.93) m、上幅 1.67～2.62 m、下幅 0.65～1.84 m、深さ 0.55 m。 形状等 北東から南西に走行し、X 32・Y 35 グリッド付近で90°近く屈曲し、2条に枝分かれする。 重複 H-11, W-7と重複し、新旧関係は本造構→W-7→H-11である。 出土遺物 覆土中より出土の須恵器壺、土師器壺、灰釉陶器壺・耳皿を図示。 時期 出土遺物および重複関係から10世紀代以前と想定される。

W-5号溝 (Fig.24・32, PL11)

位置 X 24・25, Y 33～35 主軸方向 N-16°-E 規模 長さ (8.83) m、上幅 0.72 m、下幅 0.55 m、深さ 0.24 m。 形状等 ほぼ南北方向に走行し、若干西に向けて弯曲する。断面は箱型を呈する。 重複 II-2と重複し、新旧関係は本造構→H-2である。 出土遺物 覆土中より須恵器壺蓋・壺・瓶、土師器壺が出土しており、須恵器壺蓋（1）、土師器壺（2）を図示。 時期 出土遺物および重複関係から9世紀代以前と想定される。

W-6号溝 (Fig.24・32, PL11)

位置 X 24～26, Y 33～35 主軸方向 N-23°-E 規模 長さ (11.03) m、上幅 1.63 m、下幅 0.64 m、深さ 0.31 m。 形状等 北西から南東に走行し、断面はやや丸みを帯びた台形を呈する。 重複 H-2・5・16, W-3と重複し、新旧関係は本造構→W-3→H-2・16→H-5である。 出土遺物 覆土中より須恵器壺・壺が少數出土しており、その内の須恵器高台付壺を1点図示。 時期 出土遺物および重複関係から9世紀代以前と想定される。 備考 H-2により削平されているため断言はできないが、走行方向等を考慮するとW-5号溝と同一の造構になる可能性が高い。

W-7号溝 (Fig.24)

位置 X 29・30, Y 32～35 主軸方向 N-4°-E 規模 長さ (13.96) m、上幅 0.93 m、下幅 0.37 m、深さ 0.52 m。 形状等 北から南東に走行し、断面は台形を呈する。 重複 H-4, W-4・9と重複し、新旧関係はW-9→本造構→H-4・W-4である。 出土遺物 なし。 時期 重複関係および覆土から9～10世紀代以前と想定される。

W-8号溝 (Fig.24)

位置 X 28, Y 32 ~ 36 主軸方向 N - 3° - E 規模 長さ (16.95) m、上幅 0.80 ~ 1.64 m、下幅 0.54 ~ 0.94 m、深さ 0.52 m。 形状等 ほぼ南北方向に走行し、断面はU字形を呈する。 重複 II - 8, W - 4, 9と重複し、新旧関係はW - 9 → 本遺構 → H - 8, W - 4である。 出土遺物 覆土中より須恵器・灰釉陶器が出土しているが、小破片のため図示し得なかった。 時期 重複関係および覆土から9 ~ 10世紀代以前と想定される。

W-9号溝 (Fig.24)

位置 X 28, 29, Y 33, 34 主軸方向 N - 37° - W 規模 長さ (5.62) m、上幅 1.34 m、下幅 1.09 m、深さ 0.37 m。 形状等 北西から南東に走行し、断面は箱形を呈する。 重複 II - 4, 8, W - 7, 8と重複し、新旧関係は本遺構 → W - 7, 8 → H - 4, 8である。 出土遺物 なし。 時期 重複関係および覆土から9世紀代以前と想定される。

W-10号溝 (Fig.24, 32, PL11)

位置 X 22, 23, Y 32 ~ 36 主軸方向 N - 17° - W 規模 長さ (15.63) m、上幅 0.68 ~ 1.74 m、下幅 0.49 ~ 1.25 m、深さ 0.18 m。 形状等 北東から南西に走行し、断面はU字形を呈する。 重複 W - 3と重複し、新旧関係は本遺構 → W - 3である。 出土遺物 覆土中より須恵器・土師器・灰釉陶器が出土し、須恵器Ⅱを1点図示。 時期 重複関係および覆土から10世紀代以前と想定される。

W-11号溝 (Fig.24)

位置 X 27 ~ 36, Y 33 ~ 37 主軸方向 N - 60° - E 規模 長さ (37.94) m、上幅 2.34 m、下幅 0.87 m、深さ 0.89 m。 形状等 北東から南西に走行し、断面は薺研掘のような形状を呈する。 重複 W - 2と重複し、新旧関係は本遺構 → W - 2である。 出土遺物 小破片・数点であるが、須恵器・土師器・灰釉陶器が、また1点だが円筒埴輪片も出土している。 時期 重複関係および覆土から9 ~ 10世紀代以前と想定される。

W-12号溝 (Fig.24)

位置 X 29 ~ 36, Y 33 ~ 38 主軸方向 N - 61° - E 規模 長さ (32.37) m、上幅 2.88 m、下幅 1.40 m、深さ 0.80 m。 形状等 北東から南西に走行し、断面はU字形を呈する。 重複 W - 2と重複し、新旧関係は本遺構 → W - 2である。 出土遺物 覆土中より須恵器・土師器が出土しているが、小破片のため図示し得なかった。 時期 重複関係および覆土から9 ~ 10世紀代以前と想定される。 備考 W - 11と断面形態は異なるものの、規模・走行方向等は極めて近似する。現状では重複関係等は不明であるが、覆土等は似通っており、少なくとも埋没段階には同時期に機能していたものと思われる。

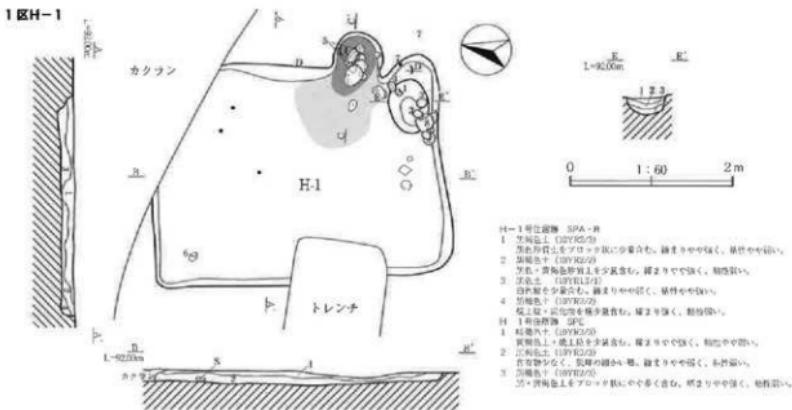
W-13号溝 (Fig.24)

位置 X 32, Y 32 ~ 34 主軸方向 N - 12° - E 規模 長さ (8.32) m、上幅 0.34 m、下幅 0.22 m、深さ 0.36 m。 形状等 北から南西に走行し、断面は台形を呈する。 重複 W - 4, 14と重複し、新旧関係は本遺構 → W - 4 → W - 14である。 出土遺物 なし。 時期 重複関係および覆土から10世紀代以前と想定される。

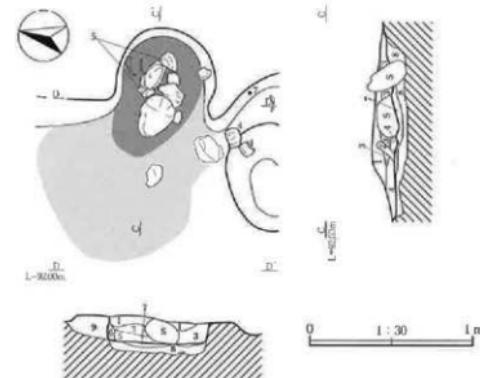
W-14号溝 (Fig.24)

位置 X 31, 32, Y 32, 33 主軸方向 N - 32° - W 規模 長さ (8.86) m、上幅 1.61 m、下幅 0.89 m、深

1区H-1

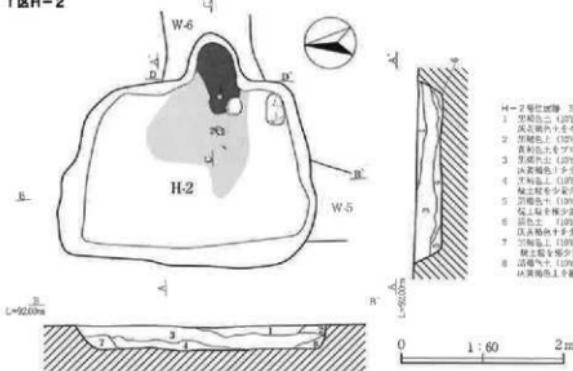


- H-1号住居跡 SPA+R
 1. 壁面土 (13YR 4/2) 壁面多少をヨコに少々含む。緑まりやや強く、基性やや弱い。
 2. 基礎土 (13YR 2/2) 砂利を含む土を多少含むし、緑まりで強く、粘性質。
 3. 壁面土 (13YR 4/2) 砂利を含む少々含む。緑まりやや弱く、基性やや弱い。
 4. 基礎土 (13YR 2/2) 砂利を含む少々含む。緑まりやや弱く、粘性質。
 5. 壁面土 (13YR 2/2) 砂利を含む少々含む。緑まりやや弱く、粘性質。
 6. 基礎土 (13YR 2/2) 砂利を含む少々含む。緑まりやや弱く、粘性質。
 7. 壁面土 (13YR 2/2) 砂利を含む少々含む。緑まりやや弱く、粘性質。
 8. 基礎土 (13YR 2/2) 砂利を含む少々含む。緑まりやや弱く、粘性質。



- H-1号住居跡 SPA+R
 1. 壁面土 (13YR 2/2) 砂利を含む少々含む。緑まりやや弱く、粘性質。
 2. 基礎土 (13YR 2/2) 砂利を含む少々含む。緑まりで強く、粘性質。
 3. 壁面土 (13YR 2/2) 砂利を含む少々含む。緑まりで強く、粘性質。
 4. 基礎土 (13YR 2/2) 砂利を含む少々含む。緑まりやや弱く、粘性質。
 5. 基礎土 (13YR 2/2) 砂利を含む少々含む。緑まりやや弱く、粘性質。
 6. 基礎土 (13YR 2/2) 砂利を含む少々含む。緑まりやや弱く、粘性質。
 7. 壁面土 (13YR 2/2) 砂利を含む少々含む。緑まりやや弱く、粘性質。
 8. 基礎土 (13YR 2/2) 砂利を含む少々含む。緑まりやや弱く、粘性質。
 9. 基礎土 (13YR 2/2) 砂利を含む少々含む。緑まりやや弱く、粘性質。

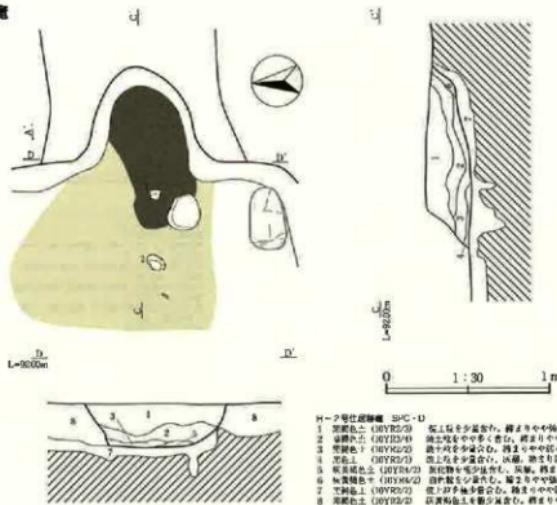
1区H-2



- H-2号住居跡 SPA+R
 1. 壁面土 (13YR 2/2) 岩石を含む少々含む。緑まり強く、粘性やや弱い。
 2. 基礎土 (13YR 2/2) 岩石を含む少々含む。緑まり強く、粘性やや弱い。
 3. 壁面土 (13YR 2/2) 岩石を含む少々含む。緑まりやや弱く、粘性やや弱い。
 4. 基礎土 (13YR 2/2) 岩石を含む少々含む。緑まりやや弱く、粘性やや弱い。
 5. 基礎土 (13YR 2/2) 岩石を含む少々含む。緑まりやや弱く、粘性やや弱い。
 6. 基礎土 (13YR 2/2) 岩石を含む少々含む。緑まり強く、粘性やや弱い。
 7. 壁面土 (13YR 2/2) 岩石を含む少々含む。緑まりやや弱く、粘性やや弱い。
 8. 基礎土 (13YR 2/2) 岩石を含む少々含む。緑まりやや弱く、粘性やや弱い。

Fig.12 1区H-1・2号住居跡

1区H-2窓



1区H-3

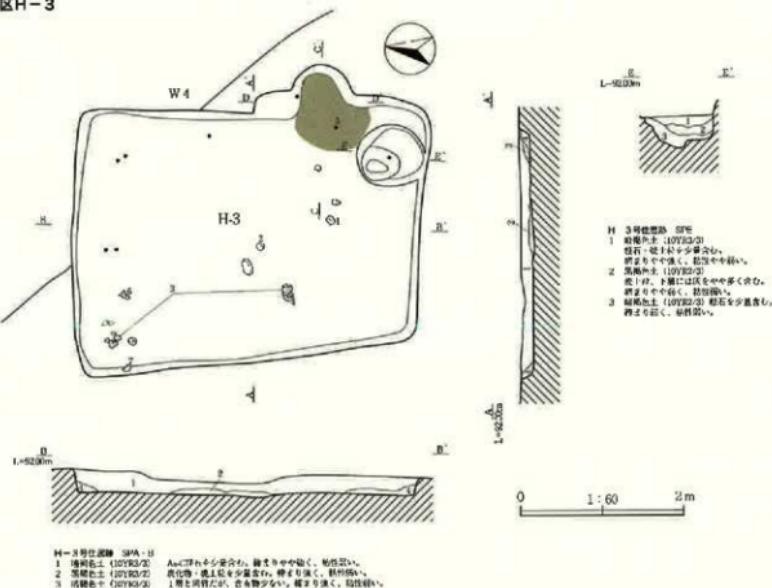
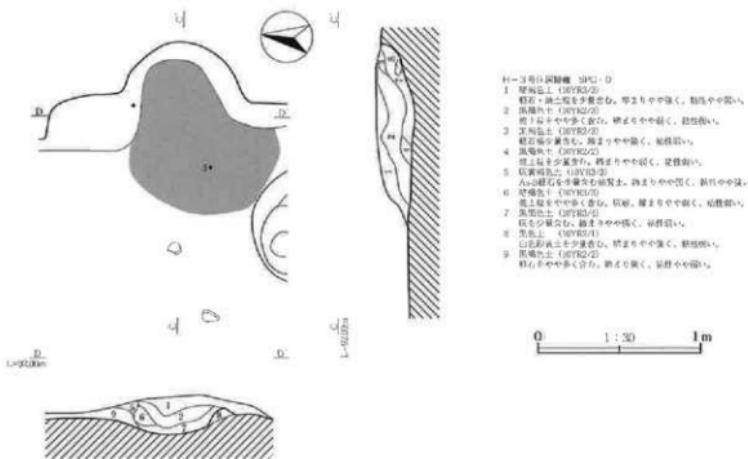


Fig.13 1区H-2号住跡跡・H-3号住跡跡

1区H-3層



1区H-4

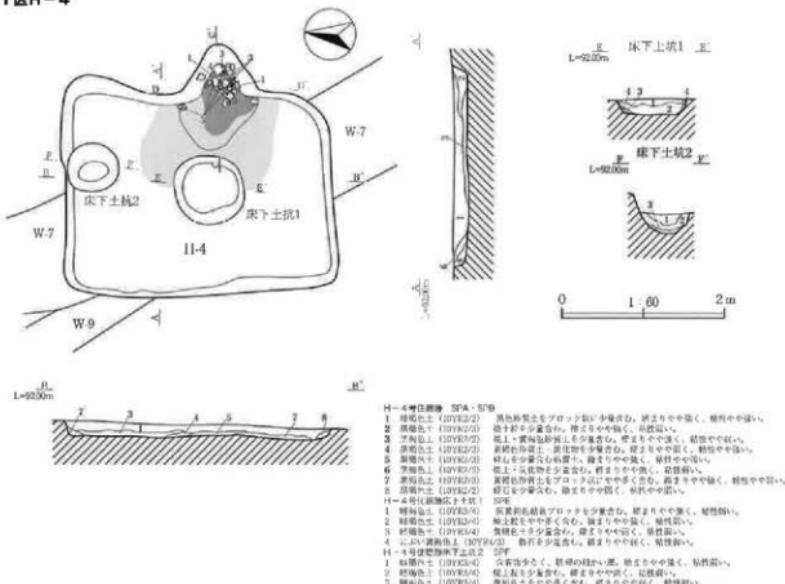


Fig.14 1区H-3号住居断面・H-4号住居断面

1区H-4竪



1区H-5

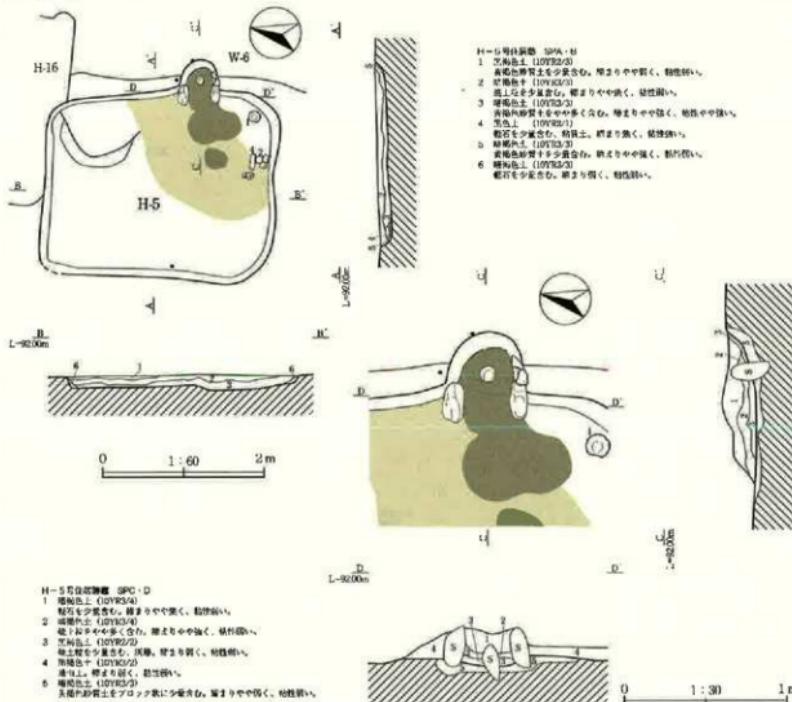
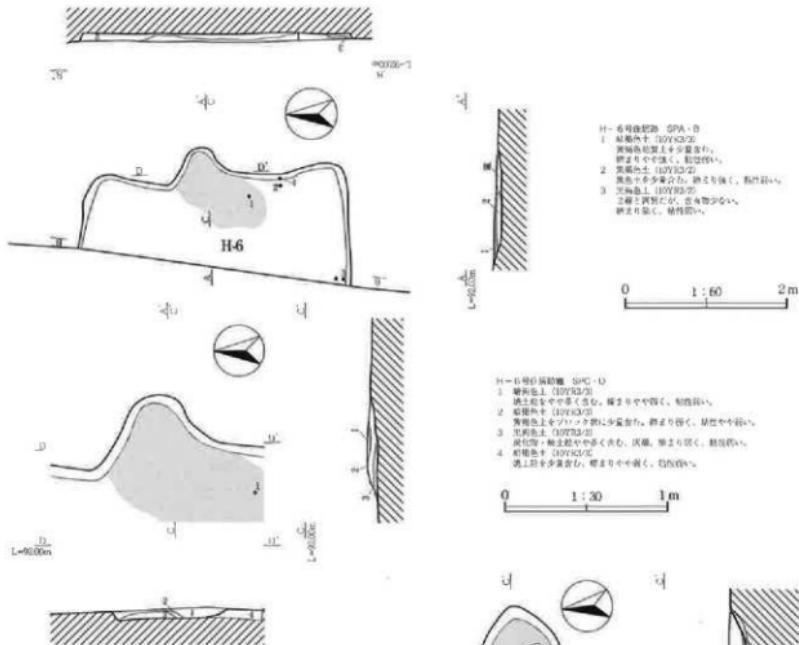


Fig.15 1区H-4号住居跡図・H-5号住居跡図

1区H-6



1区H-7

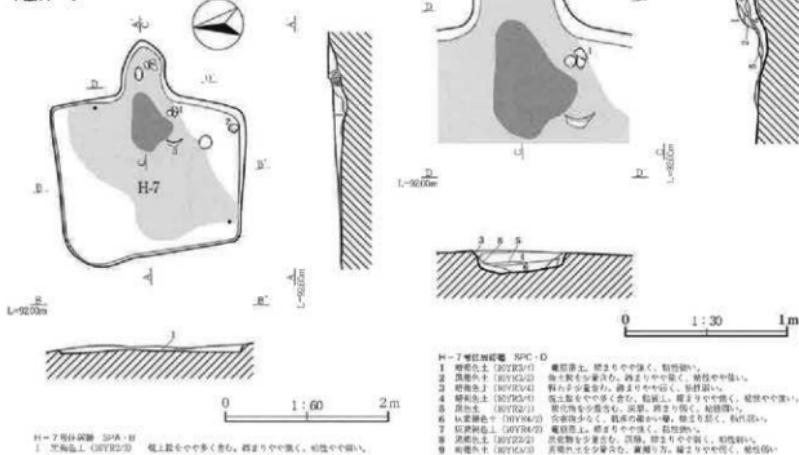
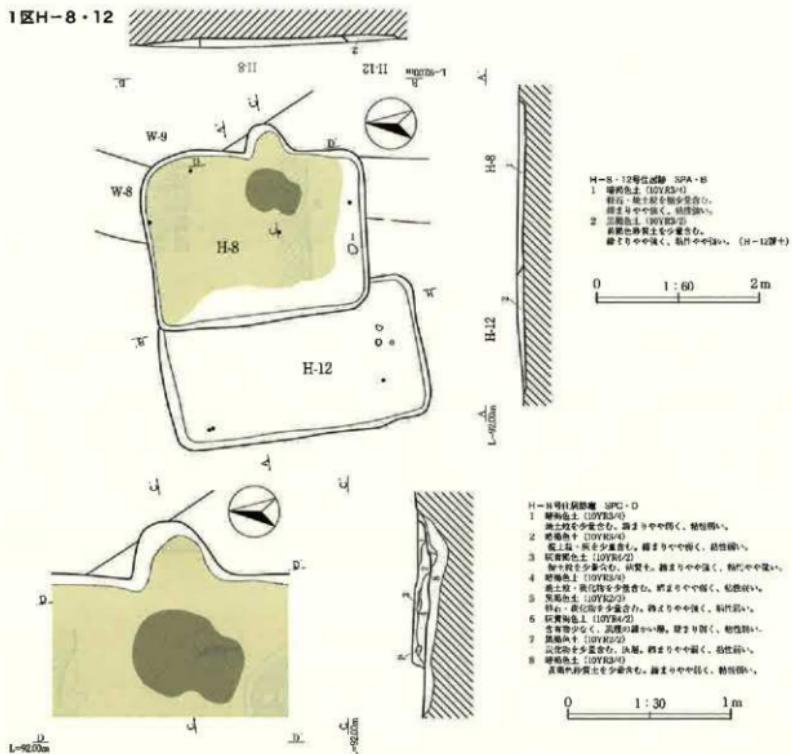


Fig.16 1区H-6・7柱状面図

1区H-8・12



1区H-9・13

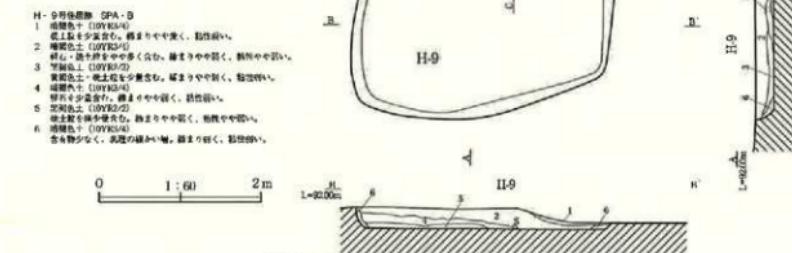
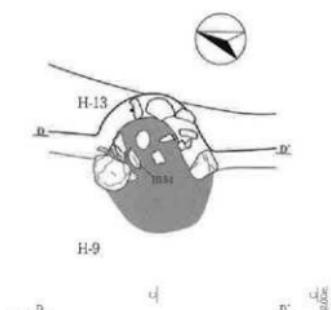
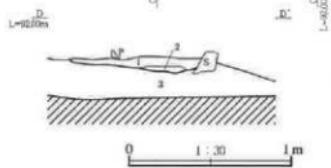


Fig.17 1区H-8・9・12・13号住居跡

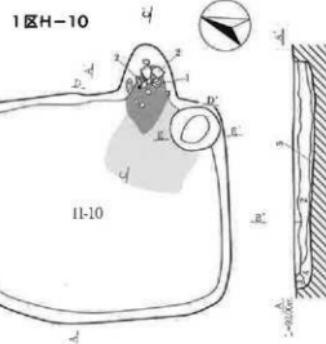
1区H-13窓



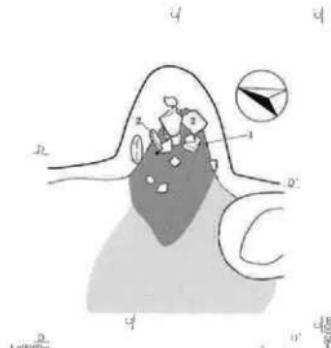
- H-13号住居跡地 SPG-D
 1 砂質土 (DVRK3/4)
 2 黄褐色土 (DVRK3/4) 程まりやや強く、粘性低い。
 3 黄褐色土 (DVRK3/4) 程まりやや強く、粘性高い。
 4 黑褐色土 (DVRK3/4) 褐色物多く多く含む、粘性。緻密を呈す。
 5 黑褐色土 (DVRK3/4) 黒褐色土をブロック状に少量含む。程まりやや強く、粘性低い。(II-9地主)



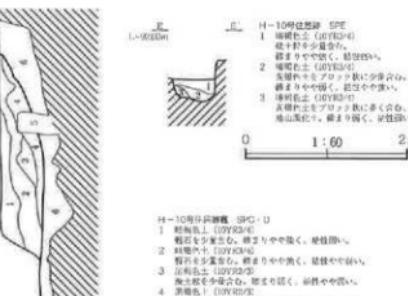
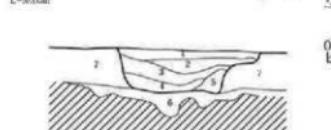
- H-10号住居跡地 SPA-B
 1 砂質土 (DVRK3/4) 黃石を多く含む。程まりやや強く、粘性低い。
 2 黑褐色土 (DVRK3/4) 黄土塊を少量含む。程まりやや強く、粘性低い。
 3 黑褐色土 (DVRK3/4) 黄褐色土を多く含む。程まりやや強く、粘性低い。
 4 黑褐色土 (DVRK3/4) 黄褐色土を多く含む。程まりやや強く、粘性低い。
 5 黑褐色土 (DVRK3/4) 黄褐色土を多く含む。程まりやや強く、粘性低い。
 6 黑褐色土 (DVRK3/4) 黄褐色土を多く含む。程まりやや強く、粘性低い。
 7 黑褐色土 (DVRK3/4) 黄褐色土を多く含む。程まりやや強く、粘性低い。



- 0 1:30 1 m

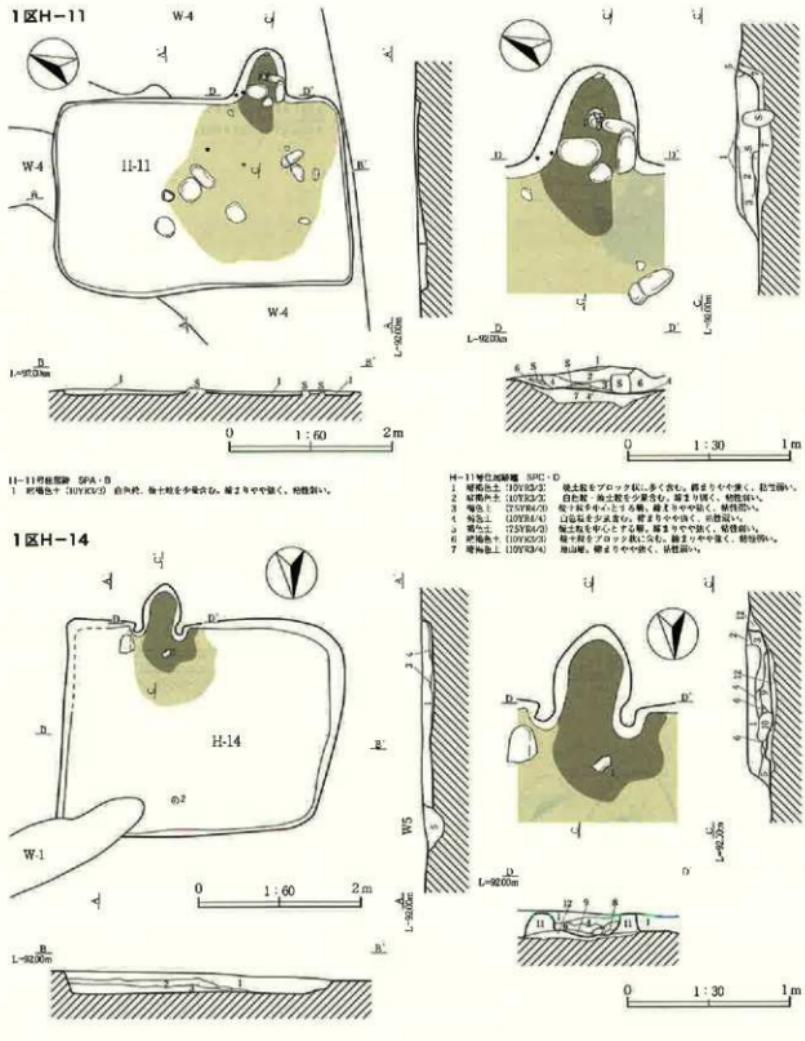


- H-10号住居跡地 SPA-E
 1 黑褐色土 (DVRK3/4) 程まりやや強く、粘性高い。
 2 黑褐色土 (DVRK3/4) 黄褐色土を多く含む。程まりやや強く、粘性低い。
 3 黑褐色土 (DVRK3/4) 黄褐色土を多く含む。程まりやや強く、粘性低い。
 4 黑褐色土 (DVRK3/4) 黄褐色土を多く含む。程まりやや強く、粘性低い。
 5 黑褐色土 (DVRK3/4) 黄褐色土を多く含む。程まりやや強く、粘性低い。
 6 黑褐色土 (DVRK3/4) 黄褐色土を多く含む。程まりやや強く、粘性低い。
 7 黑褐色土 (DVRK3/4) 黄褐色土を多く含む。程まりやや強く、粘性低い。



- H-10号住居跡地 SPG-D
 1 黑褐色土 (DVRK3/4) 黄褐色土を多く含む。程まりやや強く、粘性低い。
 2 黑褐色土 (DVRK3/4) 黄褐色土を多く含む。程まりやや強く、粘性低い。
 3 黑褐色土 (DVRK3/4) 黄褐色土を多く含む。程まりやや強く、粘性低い。
 4 黑褐色土 (DVRK3/4) 黄褐色土を多く含む。程まりやや強く、粘性低い。
 5 黑褐色土 (DVRK3/4) 黄褐色土を多く含む。程まりやや強く、粘性低い。
 6 黑褐色土 (DVRK3/4) 黄褐色土を多く含む。程まりやや強く、粘性低い。
 7 黑褐色土 (DVRK3/4) 黄褐色土を多く含む。程まりやや強く、粘性低い。

Fig.18 1区II 13号住居跡地・H-10号住居跡地

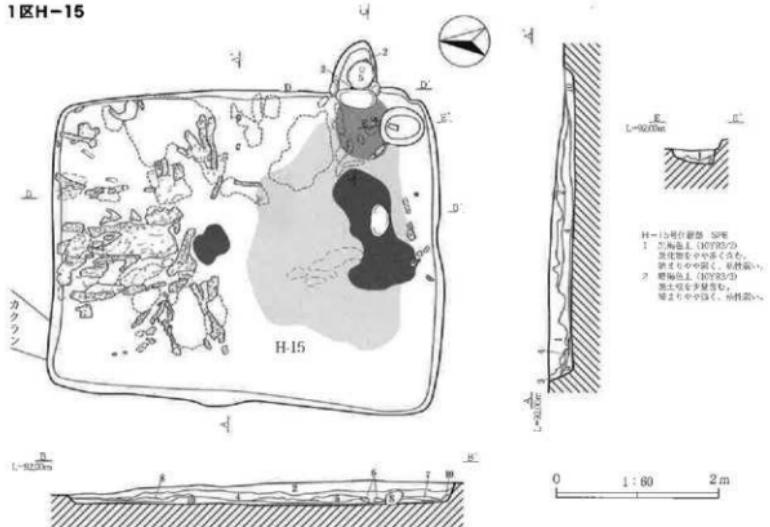


H-14 丹生郡 SPC-D
1 油褐色土 (09Y83/2) 白色粘土を少含む。緑まさりや強く、粘性弱い。
2 黄褐色土 (09Y83/2) 白色粘土を中心とする風化の痕を含む。緑まさりや強く、粘性弱い。
3 黄褐色土 (09Y83/2) 白色粘土を中心とする風化の痕を含む。緑まさりや強く、粘性弱い。
4 成層土 (09Y83/2) 白色粘土を含む。緑まさりや強く、粘性弱い。
5 灰褐色土 (09Y83/2) W-1 領上で、風化の痕を含む。緑まさりや強く、粘性弱い。

H-14 丹生郡 SPC-D
1 油褐色土 (09Y83/2) 白色粘土をやや多く含む。緑まさりや強く、粘性弱い。
2 黄褐色土 (09Y83/2) 白色粘土を中心とする風化の痕を含む。緑まさりや強く、粘性弱い。
3 黄褐色土 (09Y83/2) 白色粘土を中心とする風化の痕を含む。緑まさりや強く、粘性弱い。
4 成層土 (09Y83/2) 白色粘土を含む。緑まさりや強く、粘性弱い。
5 灰褐色土 (09Y83/2) H-14 領上で、風化の痕を含む。緑まさりや強く、粘性弱い。
6 成層土 (09Y83/2) 白色粘土を含む。緑まさりや強く、粘性弱い。
7 灰褐色土 (09Y83/2) H-14 領上で、風化の痕を含む。緑まさりや強く、粘性弱い。
8 黄褐色土 (09Y83/2) 白色粘土を少含む。灰褐色、緑まさりや強く、粘性弱い。
9 黄褐色土 (09Y83/2) 白色粘土を少含む。灰褐色、緑まさりや強く、粘性弱い。
10 灰褐色土 (09Y83/2) 天然硬度7をややこどる強。緑まさりや強く、粘性弱い。
11 灰褐色土 (09Y83/2) 天然硬度7をややこどる強。緑まさりや強く、粘性弱い。
12 灰褐色土 (09Y83/2) 山地。緑まさりや強く、粘性弱い。

Fig19 1区H-11・14号住居跡

1区H-15



- H-15号作業面 SPA-D
- 1 滑落土質
 - 2 砂質粘土 (10YR3/2)
 - 3 黄褐色土 (10YV3/2)
 - 4 泥炭地帯 (10YV3/2)
 - 5 黄褐色土 (10YV3/2)
 - 6 砂粘土 (10Y7/4)
 - 7 砂質粘土 (10YV3/2)
 - 8 黄褐色土 (10YV3/2)
 - 9 泥炭地帯 (10YV3/2)
 - 10 泥炭地帯 (10YV3/2)
- 特徴を示すと、砂質粘土は、粒度が細く、持続性がある。
黄褐色土は、粒度が粗く、持続性がある。
泥炭地帯は、粒度が細く、持続性がある。泥炭質の
持続性が少ないので、砂質粘土や砂質土質の持続性
は、泥炭地帯よりも多くなる。

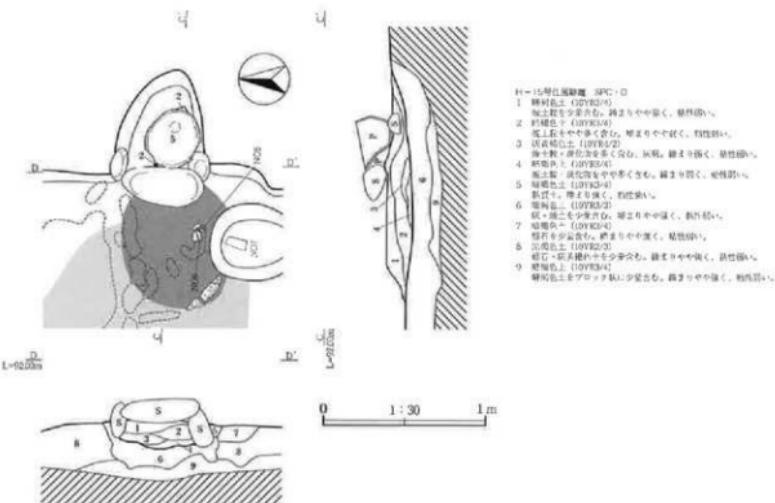
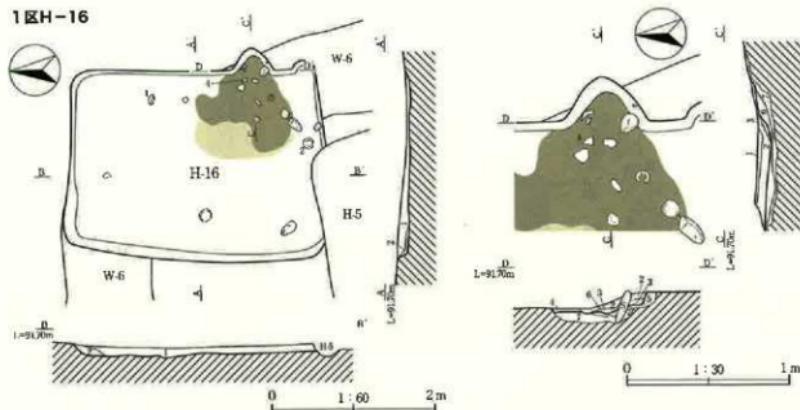


Fig.20 1区H-15号作業面

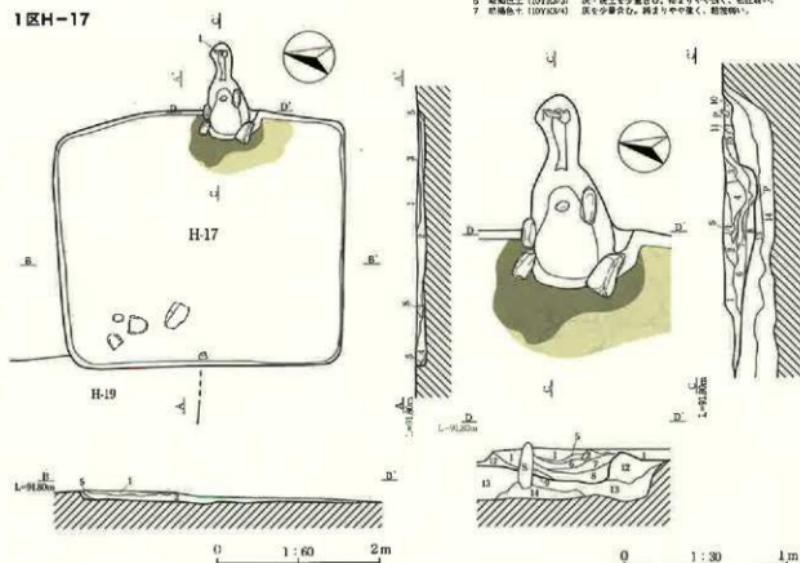
1区H-16



H-16号住居跡地盤 SPC - D

- 1 黄褐色土 (GYV3/2) 粘土質多か混合。縫まりやや強く、粒度細い。
- 2 黄褐色土 (GYV3/4) 砂土質、粘化物を多含む。縫まりやや強く、粒度細い。
- 3 硅化土 (GYV3/2) 硅化物、粘化物を多く含む。縫まりやや強く、粒度細い。
- 4 黄褐色土 (GYV3/2) 硅化物、粘土を多く含む。縫まりやや強く、粒度細い。
- 5 黄褐色土 (GYV3/2) 硅化物、粘土を多く含む。縫まりやや強く、粒度細い。
- 6 黄褐色土 (GYV3/3) 砂、灰土を少含む。縫まりやや強く、粒度細い。
- 7 黄褐色土 (GYV3/4) 砂を少含む。縫まりやや強く、粒度細い。

1区H-17



H-17号住居跡地盤 SPC - D

- 1 黄褐色土 (GYV3/2) 粘土質を少含む。縫まりやや強く、粒度細い。
- 2 黄褐色土 (GYV3/3) 砂、灰土を少含む。縫まりやや強く、粒度細い。
- 3 黄褐色土 (GYV3/4) 砂、灰土を多く含む。縫まりやや強く、粒度細い。
- 4 黄褐色土 (GYV3/2) 砂、灰土を多く含む。縫まりやや強く、粒度細い。
- 5 黄褐色土 (GYV3/3) 砂、灰土を少含む。縫まりやや強く、粒度細い。
- 6 黄褐色土 (GYV3/4) 砂、灰土を多く含む。縫まりやや強く、粒度細い。
- 7 黄褐色土 (GYV3/2) 砂、灰土を多く含む。縫まりやや強く、粒度細い。
- 8 灰褐色土 (GYV3/2) 砂、灰土を少含む。縫まりやや強く、粒度細い。
- 9 灰褐色土 (GYV3/3) 砂、灰土を多く含む。縫まりやや強く、粒度細い。
- 10 灰褐色土 (GYV3/2) 砂、灰土を多く含む。縫まりやや強く、粒度細い。
- 11 灰褐色土 (GYV3/3) 砂、灰土を多く含む。縫まりやや強く、粒度細い。
- 12 灰褐色土 (GYV3/4) 砂、灰土を多く含む。縫まりやや強く、粒度細い。
- 13 灰褐色土 (GYV3/2) 砂、灰土を多く含む。縫まりやや強く、粒度細い。
- 14 灰褐色土 (GYV3/3) 砂、灰土を多く含む。縫まりやや強く、粒度細い。

Fig.21 1区H-16・17号住居跡

1区H-18

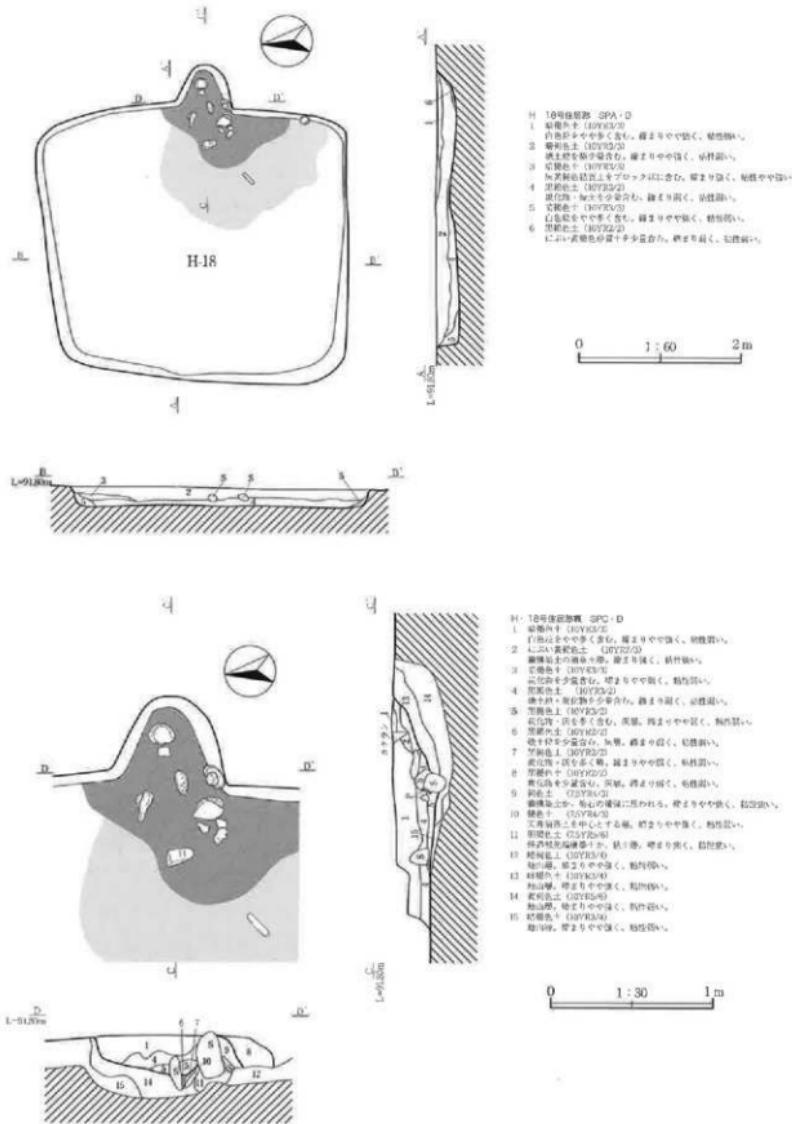
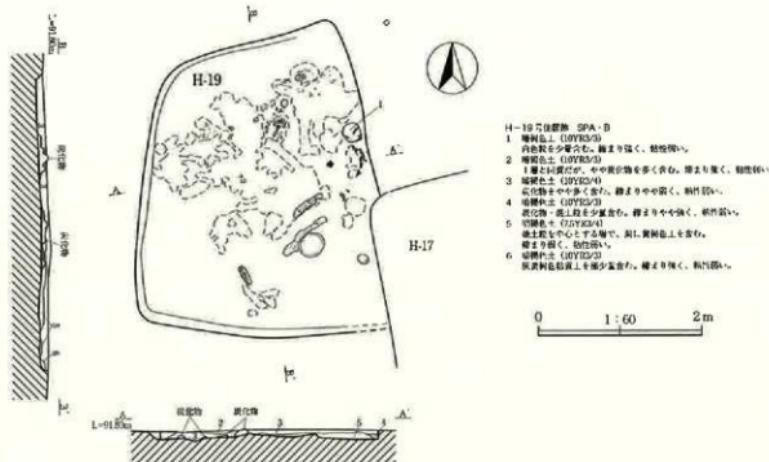


Fig.22 1区H-18号住居跡

1区H-19



1区W-1

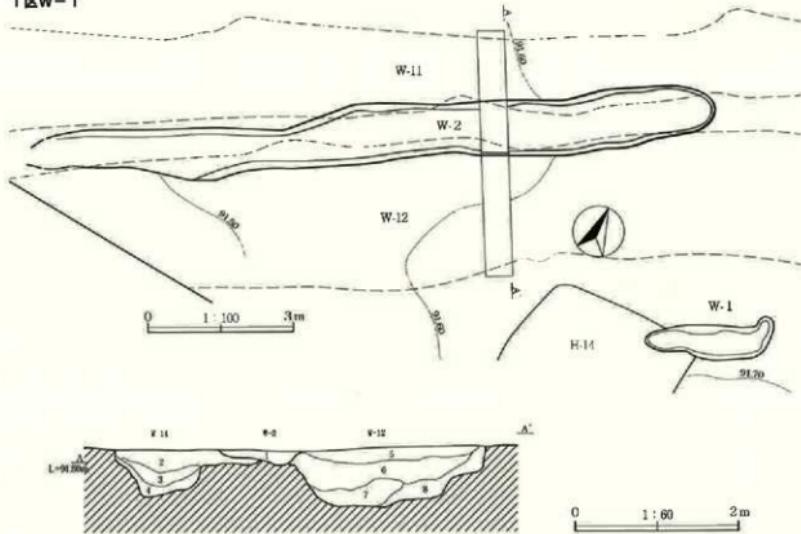
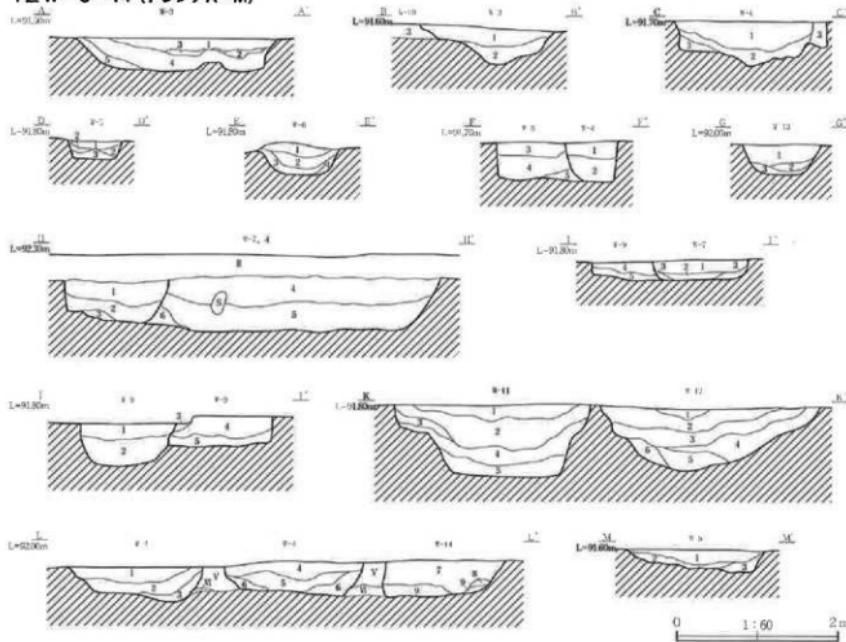


Fig.23 1区H-19号住居跡・W-1・2号溝

1区W-3～14 (トレーチA～M)



- W-3号層 SP**
1 油井砂岩土 (19Y13/2)
2 黄褐色土 (20Y13/2)
3 草黄色土 (20Y13/2)
4 黄褐色土 (20Y13/2)
5 黄褐色土 (20Y13/2)
W-3・10段落 SP
1 黄褐色土 (20Y13/2)
2 黄褐色土 (20Y13/2)
3 黄褐色土 (20Y13/2)
4 黄褐色土 (20Y13/2)
W-4号層 NPC
1 油井砂岩土 (19Y13/2)
2 黄褐色土 (20Y13/2)
3 黄褐色土 (20Y13/2)
4 黄褐色土 (20Y13/2)
W-5号層 SP
1 油井砂岩土 (19Y13/2)
2 黄褐色土 (20Y13/2)
3 黄褐色土 (20Y13/2)
4 黄褐色土 (20Y13/2)
W-6号層 SPE
1 地下水帶土 (19Y13/2)
2 黄褐色土 (19Y13/2)
3 黄褐色土 (19Y13/2)
4 黄褐色土 (19Y13/2)
5 黄褐色土 (19Y13/2)
6 黄褐色土 (19Y13/2)
7 黄褐色土 (19Y13/2)
8 黄褐色土 (19Y13/2)
W-7号層 SP
1 油井砂岩土 (19Y13/2)
2 黄褐色土 (20Y13/2)
3 黄褐色土 (20Y13/2)
4 黄褐色土 (20Y13/2)
5 黄褐色土 (20Y13/2)
W-8号層 SP
1 油井砂岩土 (19Y13/2)
2 黄褐色土 (20Y13/2)
3 黄褐色土 (20Y13/2)
4 黄褐色土 (20Y13/2)
5 黄褐色土 (20Y13/2)
W-9号層 SP
1 油井砂岩土 (19Y13/2)
2 黄褐色土 (20Y13/2)
3 黄褐色土 (20Y13/2)
4 黄褐色土 (20Y13/2)
5 黄褐色土 (20Y13/2)
- W-8号層 SP**
1 油井砂岩土 (19Y13/2)
2 黄褐色土 (20Y13/2)
3 黄褐色土 (20Y13/2)
4 黄褐色土 (20Y13/2)
5 黄褐色土 (20Y13/2)
W-10号層 SP
1 黄褐色土 (20Y13/2)
2 黄褐色土 (20Y13/2)
3 黄褐色土 (20Y13/2)
4 黄褐色土 (20Y13/2)
5 黄褐色土 (20Y13/2)
6 黄褐色土 (20Y13/2)
7 黄褐色土 (20Y13/2)
8 黄褐色土 (20Y13/2)
9 黄褐色土 (20Y13/2)
W-11号層 SP
1 油井砂岩土 (19Y13/2)
2 黄褐色土 (20Y13/2)
3 黄褐色土 (20Y13/2)
4 黄褐色土 (20Y13/2)
5 黄褐色土 (20Y13/2)
6 黄褐色土 (20Y13/2)
7 黄褐色土 (20Y13/2)
8 黄褐色土 (20Y13/2)
9 黄褐色土 (20Y13/2)
10 黄褐色土 (20Y13/2)
W-12号層 SP
1 油井砂岩土 (19Y13/2)
2 黄褐色土 (20Y13/2)
3 黄褐色土 (20Y13/2)
4 黄褐色土 (20Y13/2)
5 黄褐色土 (20Y13/2)
6 黄褐色土 (20Y13/2)
7 黄褐色土 (20Y13/2)
8 黄褐色土 (20Y13/2)
9 黄褐色土 (20Y13/2)
10 黄褐色土 (20Y13/2)
W-13号層 SP
1 油井砂岩土 (19Y13/2)
2 黄褐色土 (20Y13/2)
3 黄褐色土 (20Y13/2)
4 黄褐色土 (20Y13/2)
5 黄褐色土 (20Y13/2)
6 黄褐色土 (20Y13/2)
7 黄褐色土 (20Y13/2)
8 黄褐色土 (20Y13/2)
9 黄褐色土 (20Y13/2)
10 黄褐色土 (20Y13/2)
W-14号層 SP
1 油井砂岩土 (19Y13/2)
2 黄褐色土 (20Y13/2)
3 黄褐色土 (20Y13/2)
4 黄褐色土 (20Y13/2)
5 黄褐色土 (20Y13/2)
- W-15号層 SP**
1 黄褐色土 (20Y13/2)
2 黄褐色土 (20Y13/2)
3 黄褐色土 (20Y13/2)
4 黄褐色土 (20Y13/2)
5 黄褐色土 (20Y13/2)
6 黄褐色土 (20Y13/2)
7 黄褐色土 (20Y13/2)
8 黄褐色土 (20Y13/2)
9 黄褐色土 (20Y13/2)
10 黄褐色土 (20Y13/2)
- W-16号層 SP**
1 黄褐色土 (20Y13/2)
2 黄褐色土 (20Y13/2)
3 黄褐色土 (20Y13/2)
4 黄褐色土 (20Y13/2)
5 黄褐色土 (20Y13/2)
6 黄褐色土 (20Y13/2)
7 黄褐色土 (20Y13/2)
8 黄褐色土 (20Y13/2)
9 黄褐色土 (20Y13/2)
10 黄褐色土 (20Y13/2)
- W-17号層 SP**
1 黄褐色土 (20Y13/2)
2 黄褐色土 (20Y13/2)
3 黄褐色土 (20Y13/2)
4 黄褐色土 (20Y13/2)
5 黄褐色土 (20Y13/2)
- W-18号層 SP**
1 黄褐色土 (20Y13/2)
2 黄褐色土 (20Y13/2)
3 黄褐色土 (20Y13/2)
4 黄褐色土 (20Y13/2)
5 黄褐色土 (20Y13/2)
- W-19号層 SP**
1 黄褐色土 (20Y13/2)
2 黄褐色土 (20Y13/2)
3 黄褐色土 (20Y13/2)
4 黄褐色土 (20Y13/2)
- W-20号層 SP**
1 黄褐色土 (20Y13/2)
2 黄褐色土 (20Y13/2)
3 黄褐色土 (20Y13/2)

Fig.24 1区W-3～14号溝

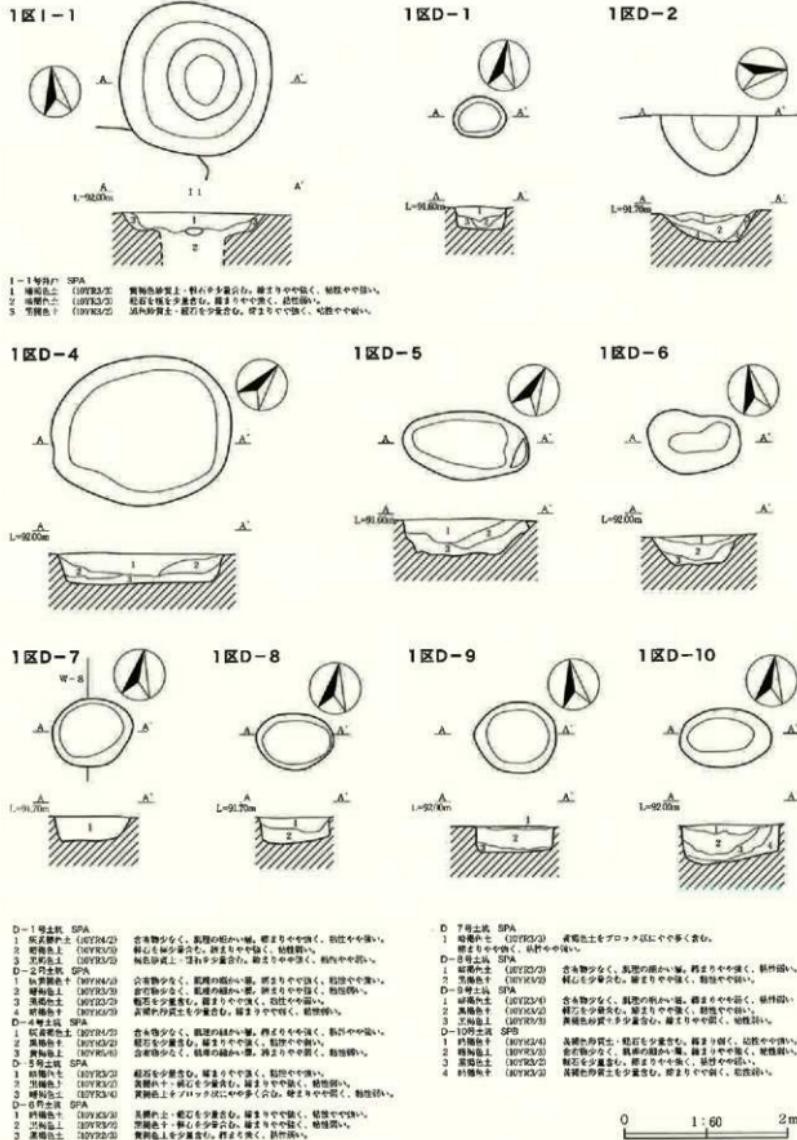


Fig.25 1区I-1号井戸、D-1・2・4~10号上坑

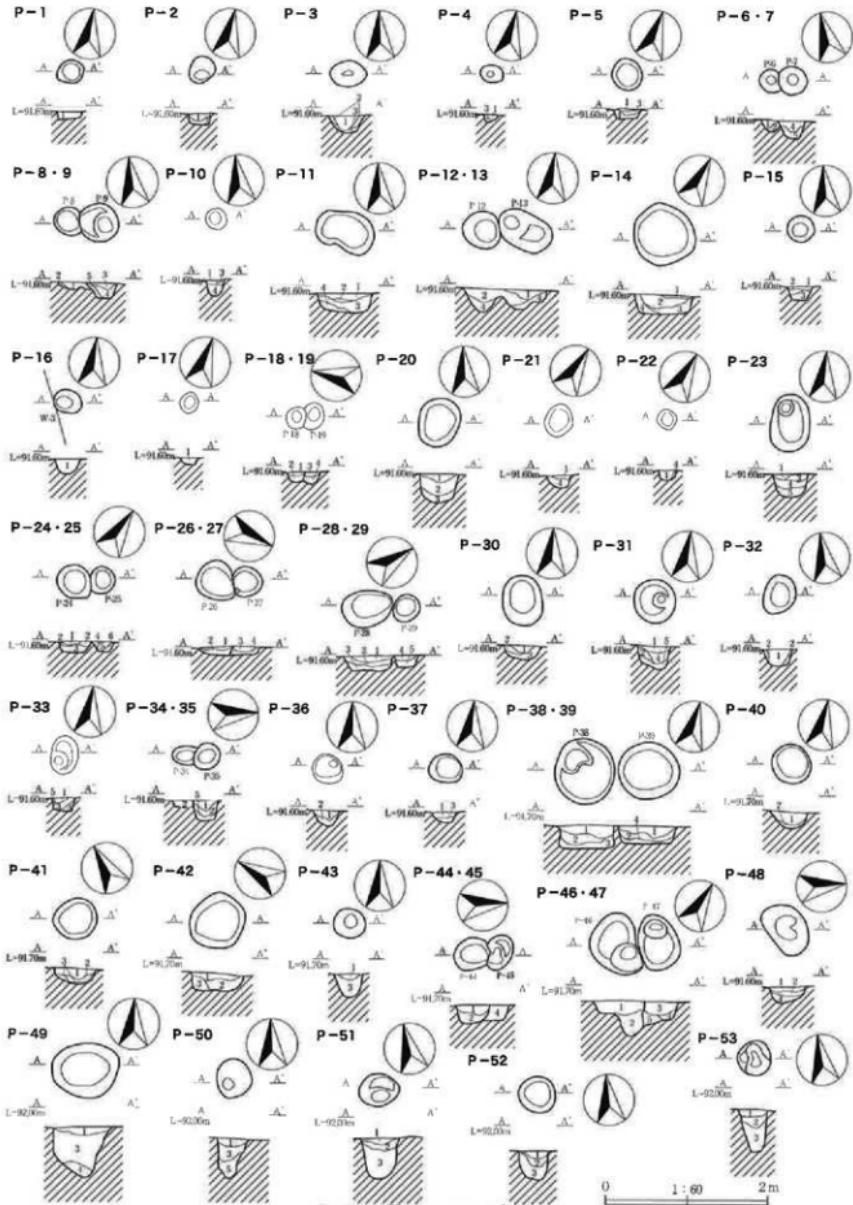
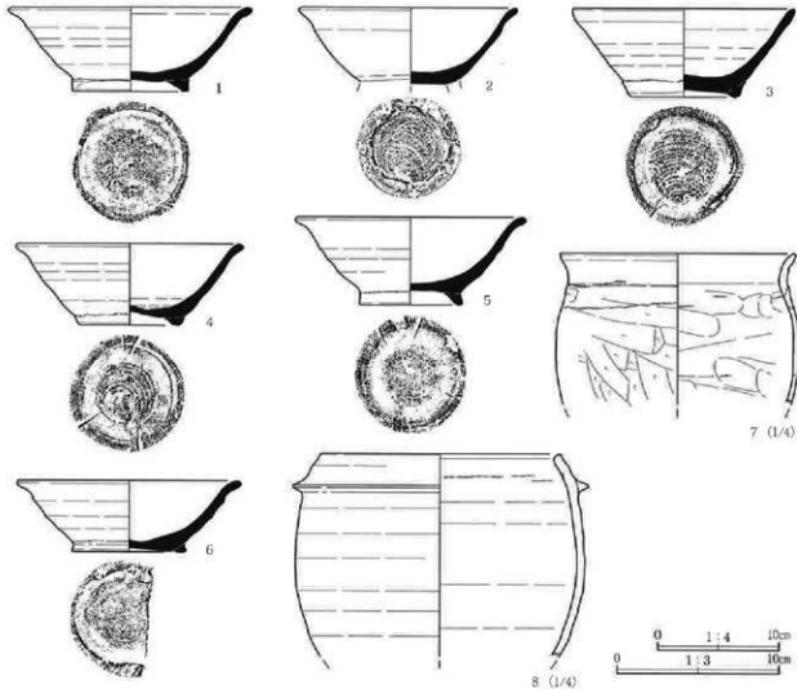


Fig.26 1区P-1~53号ピット

1区H-1



1区H-2



1区H-3

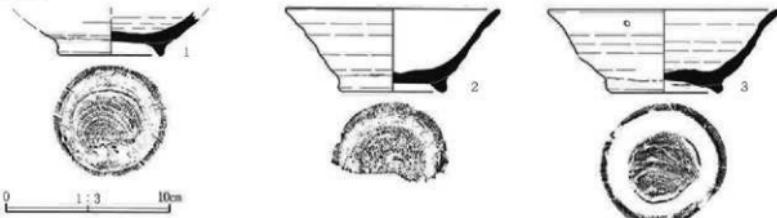
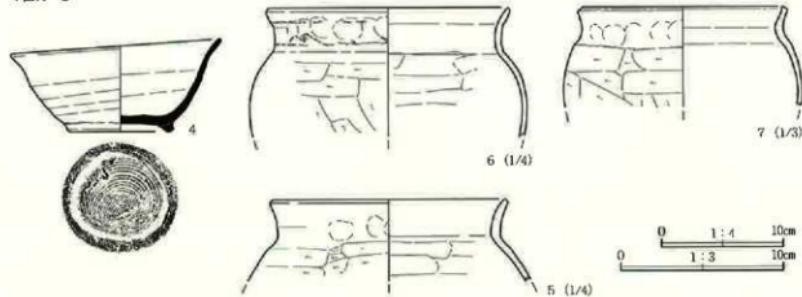
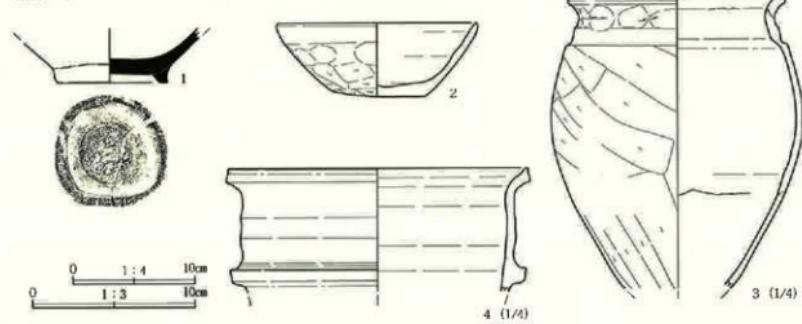


Fig.28 1区H-1～3号住居跡出土遺物

1区H-3



1区H-4



1区H-5

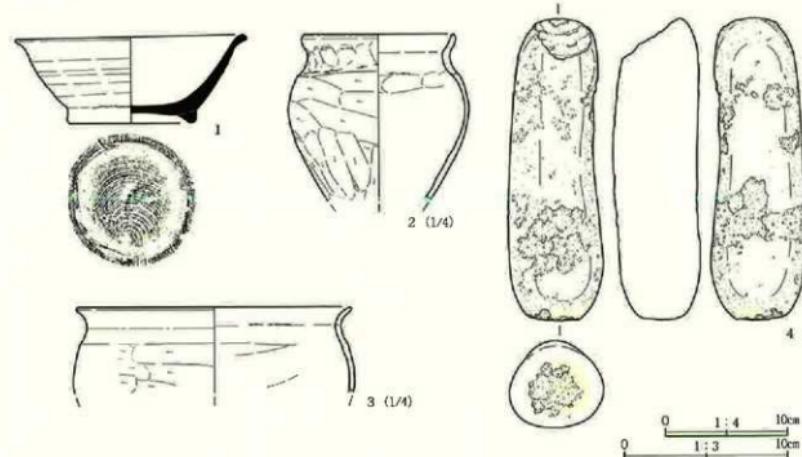
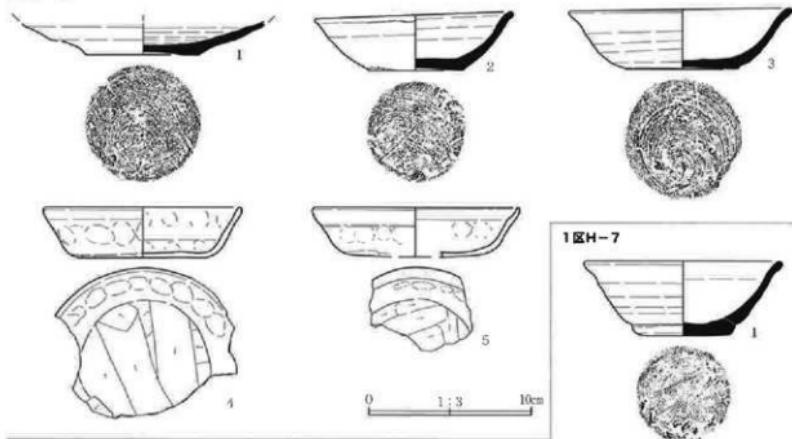


Fig.29 1区H-3～5 号住居跡出土遺物

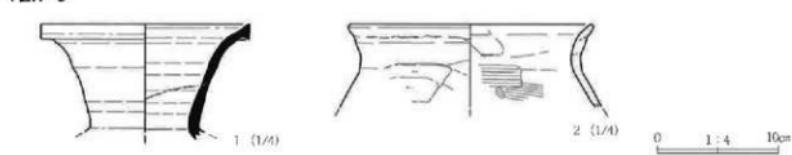
1区H-6



1区H-8



1区H-9



1区H-10

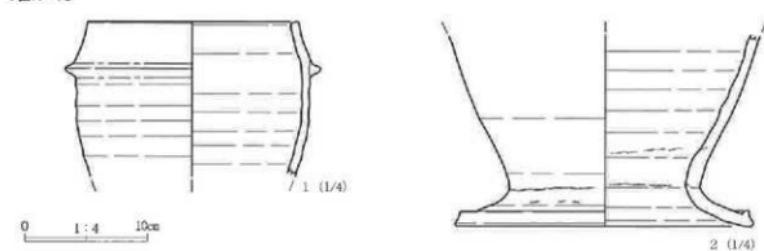


Fig.30 1区H-6～10号住居跡出土遺物

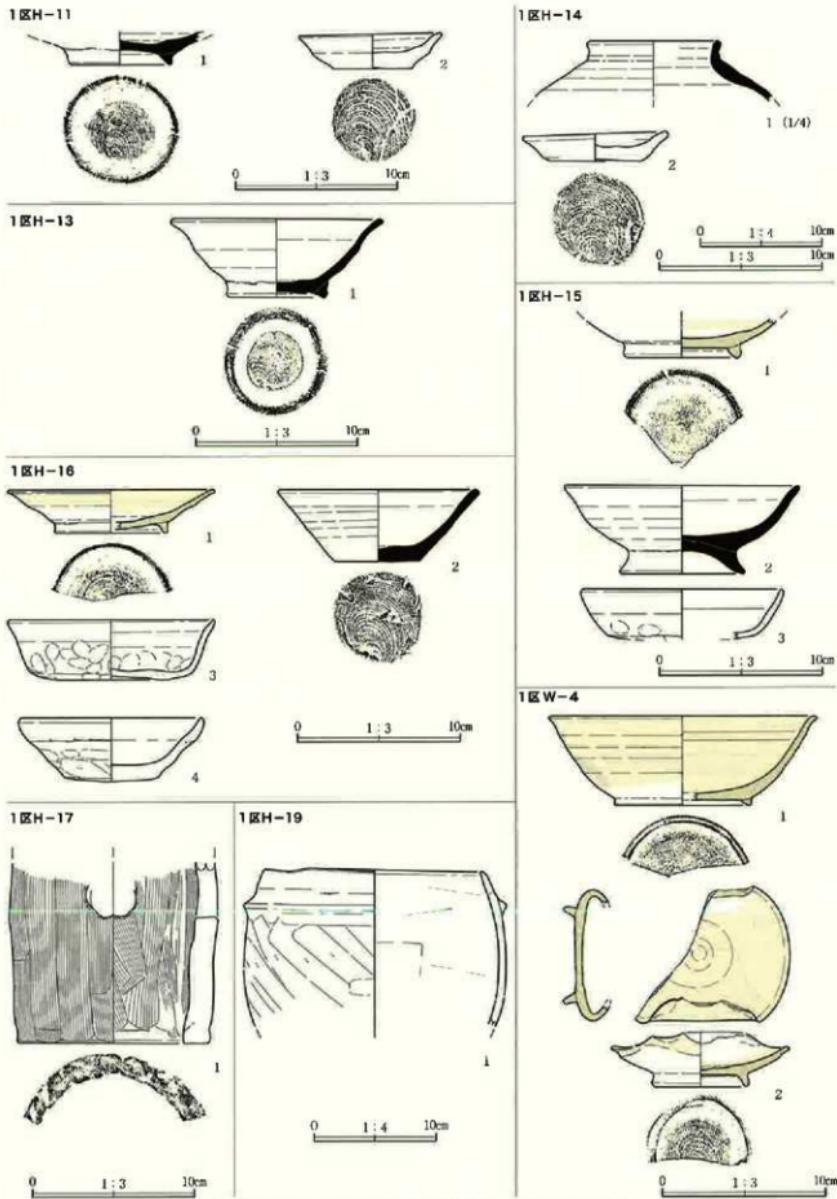


Fig.31 1区H-11・13～17・19号住居跡、W-4号溝出土遺物

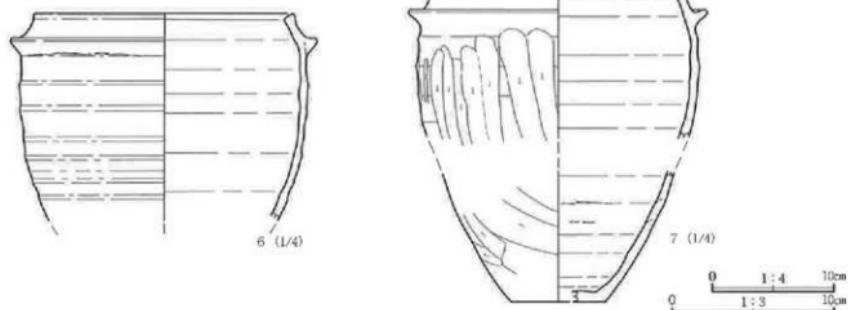
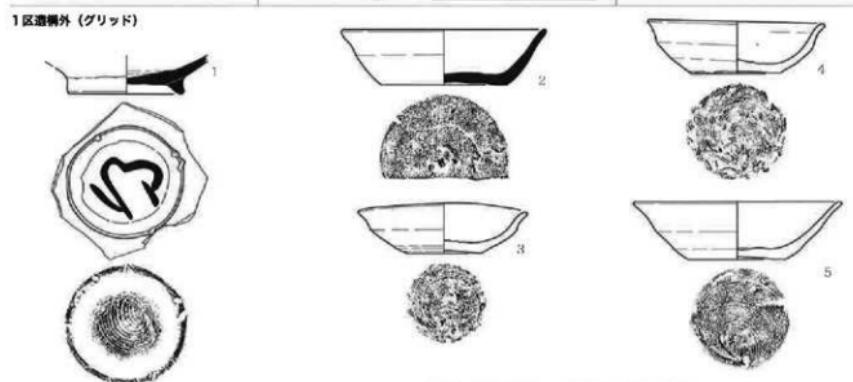
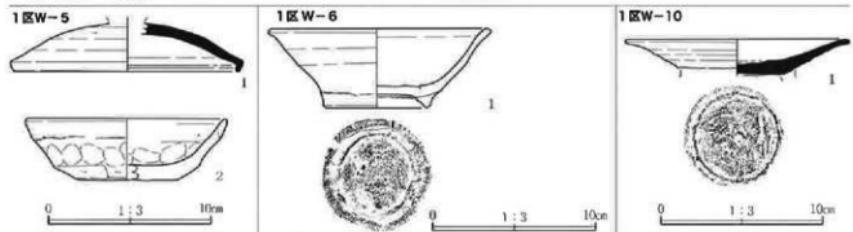
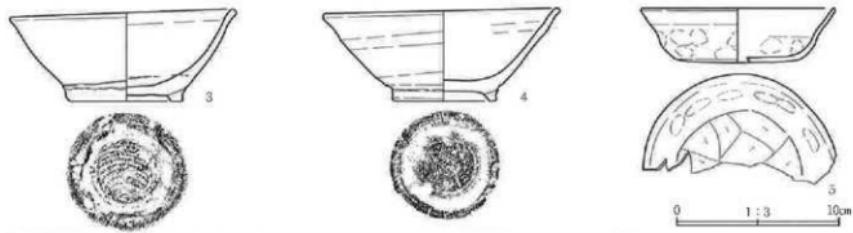


Fig.32 1区W-4~6・10号窯、遺構外出土遺物

2 2区

(1) 積穴住居跡

H-1号住居跡 (Fig.34・39, PL. 6・11)

位置 X 47・48、Y 37 主軸方向 N - 77° - E 規模 東西軸 (3.77) m、南北軸 (1.52) m、現壁高 0.11 m。北側は試掘トレンチ、南側を擾乱により削平される。面積 (2.96) m² 床面 ほぼ平坦で、暗褐色・黄褐色土による貼り床。竈周辺に強い硬化が認められる。竈 東壁に位置する。確認長 0.60 m、燃焼部 0.43 m を測る。燃焼部に支脚石が残る。出土遺物 竈より出土した羽釜 (1)・瓶 (2) の2点を図示。時期 出土遺物の傾向から 10世紀代と想定される。

H-2号住居跡 (Fig.34・39, PL. 7・11)

位置 X 44、Y 33 主軸方向 N - 81° - E 規模 東西軸 3.37 m、南北軸 (2.36) m、現壁高 0.07 m。住居北半は調査区外になる。面積 (5.89) m² 床面 ほぼ平坦で、暗褐色土による貼り床を施す。竈周辺を中心として、住居中央まで硬化が強い。竈 東壁に位置し、住居の形態から南寄りに造り付けているものと思われる。確認長 0.57 m、燃焼部 0.37 m を割る。竈構築材として粘土の利用を確認した。出土遺物 土師器壺 (1)、砥石 (2) を図示。土師器壺は器高が低く、底部は扁平なヘラ削り調整によるものである。なお、図示し得なかつたが台付きの土師器甕も出土している。時期 出土遺物の傾向から 8世紀後半～9世紀前半と想定される。

H-3号住居跡 (Fig.35, PL. 7)

位置 X 41・42、Y 34 主軸方向 N - 88° - E 規模 東西軸 (3.52) m、南北軸 (2.04) m、現壁高 0.19 m。住居南側は擾乱により削平される。面積 (5.10) m² 床面 ほぼ平坦な地山床。竈 東壁に位置する。確認長 0.90 m、燃焼部 0.28 m を割る。重複 W-4 と重複し、新旧関係は W-4 → 本遺構である。出土遺物 須恵器、土師器、灰釉陶器、羽釜が出土しているが、いずれも小破片であり図示し得た遺物はない。時期 出土遺物から 9世紀後半～10世紀代と想定される。

H-4号住居跡 (Fig.35, PL. 7)

位置 X 44、Y 35 主軸方向 N - 67° - E 規模 後世の削平により住居坡はほぼ削平を受け、竈のみの確認である。竈 東壁に位置する。確認長 0.67 m、燃焼部 0.42 m を測る。出土遺物 なし。時期 出土遺物が破片で少数、重複関係もなく自然としないが、他の住居跡の所属時期の傾向から 9～10世紀代と想定しておく。

H-5号住居跡 (Fig.36, PL. 7)

位置 X 42・43、Y 34・35 主軸方向 N - 80° - E 規模 東西軸 2.64 m、南北軸 2.68 m、現壁高 0.13 m。面積 (5.90) m² 床面 暗褐色土を中心とする貼り床を施す。竈前部を中心に強い硬化が認められる。竈 東壁の南寄りに位置する。確認長 (0.51) m、燃焼部 0.35 m を測る。袖の一部および窓道先端は後世の擾乱により削平を受ける。出土遺物 須恵器、土師器が出土しているが、少量・小破片のため図示し得た遺物はない。時期 出土遺物の傾向から 10世紀代と想定される。

(2) 堀立柱建物跡

B-1号堀立柱建物跡 (Fig.36・37、PL 7)

位置 X 47・48、Y 37 主軸方向 N - 21° - W 規模 衍行(2)間、梁行2間。東西に伸びる可能性が考えられるが、西側はW-1により不明になっている。衍行長(3.68)m、梁行3.46m。柱穴は7基を確認、柱穴間隔は衍行1.54～1.84m、梁行1.68～1.79mを測る。重複 W-1と重複し、新旧関係は本遺構→W-1である。出土遺物 なし。時期 出土遺物がないため判然としないが、重複関係から9世紀以前と想定される。

(3) 溝跡

W-1号溝 (Fig.37、PL. 8)

位置 X 46～50、Y 33～39 主軸方向 N - 15° - W 規模 長さ 31.84m、上幅 1.56m、下幅 1.02m、深さ 0.37m。形状等 北から走行し、X 47・Y 36グリッド付近で45°程度東へ振り、南東へ屈曲する。断面はU字状を呈する。覆土はAs-Kk・As-B軽石が良好にレンズ状堆積を示し、As-B軽石下直前まで機能していたことが分かる。重複 W-2と重複し、新旧関係はW-2→本遺構である。出土遺物 覆土中より円筒埴輪・須恵器・灰釉陶器が出土しているが、いずれも小破片で図示し得なかった。時期 覆土から12世紀初頭(1108年)の埋没である。

W-2号溝 (Fig.38、PL 8・11)

位置 X 46～50、Y 33～39 主軸方向 N - 13° - W 規模 長さ 31.84m、上幅 3.69m、下幅 2.16m、深さ 0.92m。形状等 北から走行し、X 47・Y 36グリッド付近で45°程度東へ振り、南東へ屈曲する。断面はU字状を呈する。重複 B-1、W-1と重複し、新旧関係はB-1→本遺構→W-1である。出土遺物 覆土中より円筒埴輪・須恵器・土器・灰釉陶器が出土し、土器壊を1点図示した。小型化の傾向を示し、底部は回転糸切りによる成形である。時期 出土遺物および重複関係から10世紀後半以前と思われる。備考 W-1号溝と走行方向が同じであり、W-1号溝は本遺構の埋没段階の一地点を示しているとも考えられ、同一遺構となる可能性もある。

W-3号溝 (Fig.38)

位置 X 53～60、Y 37・38 主軸方向 N - 92° - W 規模 長さ 29.18m、上幅 2.37m、下幅 0.45m、深さ 0.54m。形状等 南東から北へ湾曲し西へ走行する。断面は緩やかなV字状を呈する。出土遺物 なし。時期 覆土にAs-Kk・As-B軽石が良好にレンズ状堆積を示し、12世紀初頭(1108年)の埋没である。

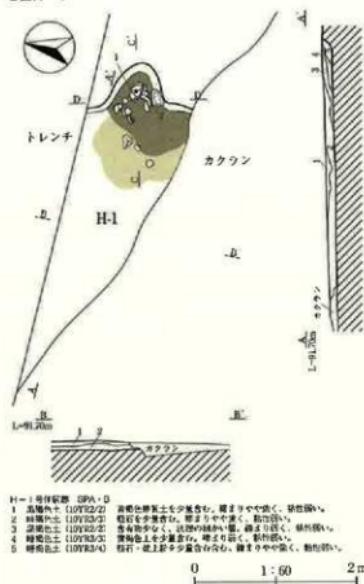
W-4号溝 (Fig.38、PL 8)

位置 X 51～55、Y 33～36 主軸方向 N - 44° - E 規模 長さ 20.18m、上幅 0.33m、下幅 0.16m、深さ 0.12m。形状等 南西から北東へ走行し、断面はU字上を呈する。出土遺物 なし。時期 覆土にAs-Kk・As-B軽石が良好にレンズ状堆積を示し、12世紀初頭(1108年)の埋没である。

(4) 井戸、土坑、ピット (Fig.38・39、PL 8)

井戸、土坑、ピットについては「Tab. 3 2区 井戸・土坑・ピット計測表」を参照のこと。

2区H-1



2区H-2

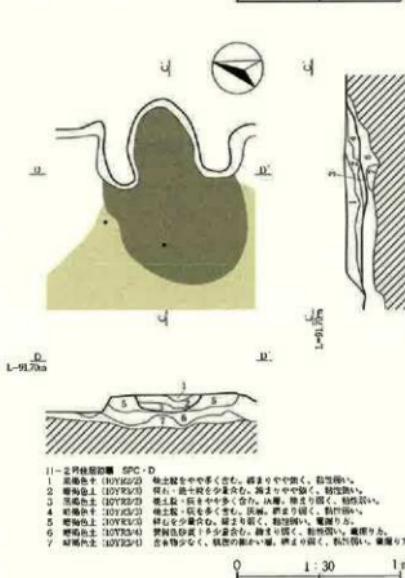
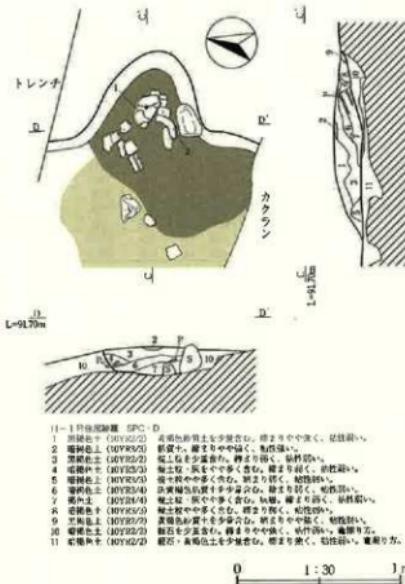
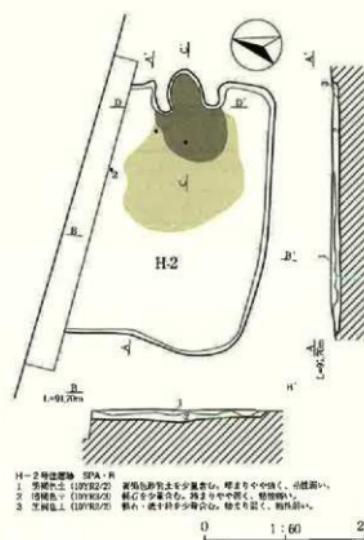
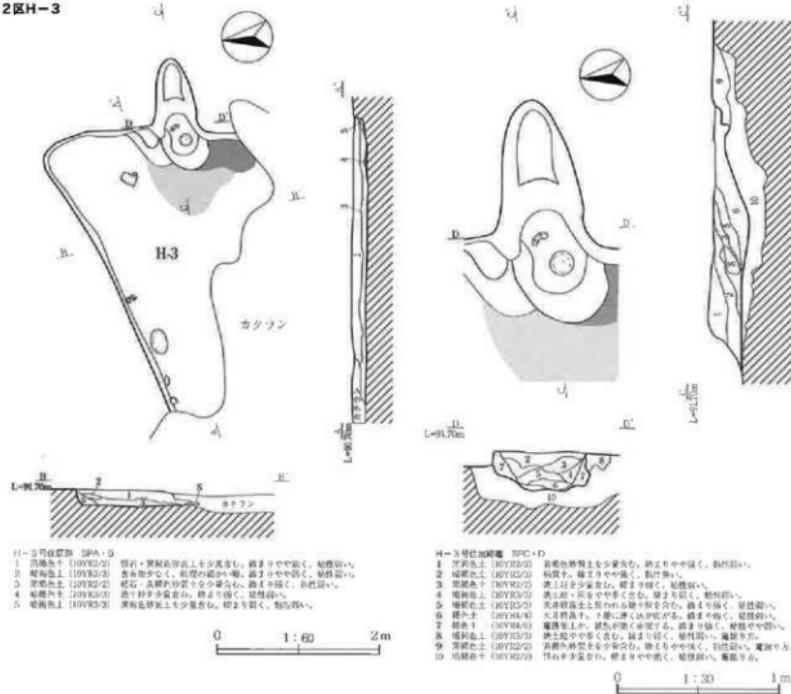


Fig.34 2区H-1・2号住居跡

2区H-3



2区H-4

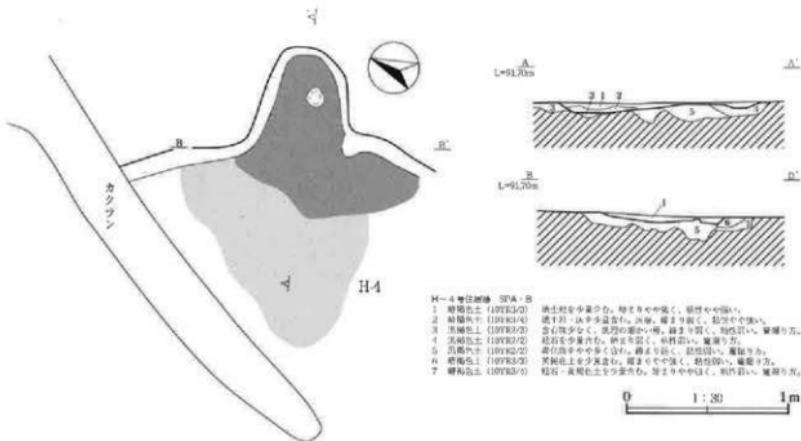
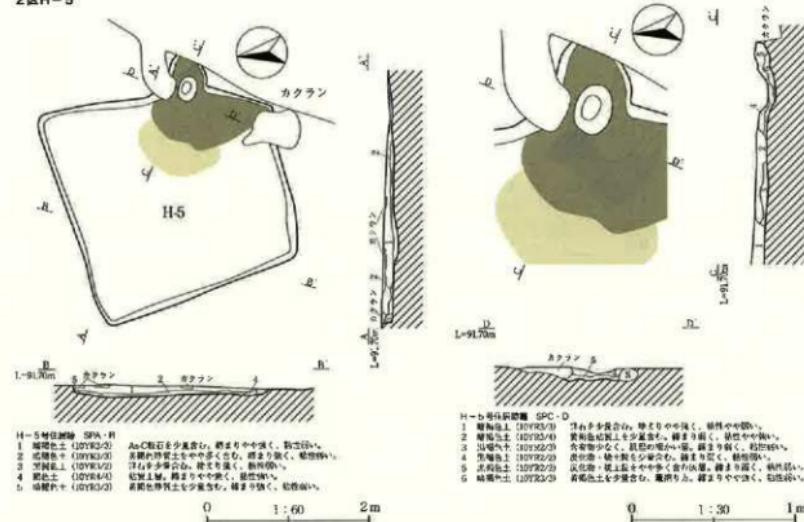


Fig.35 2区II-3・4号住居跡

2区H-5



2区B-1

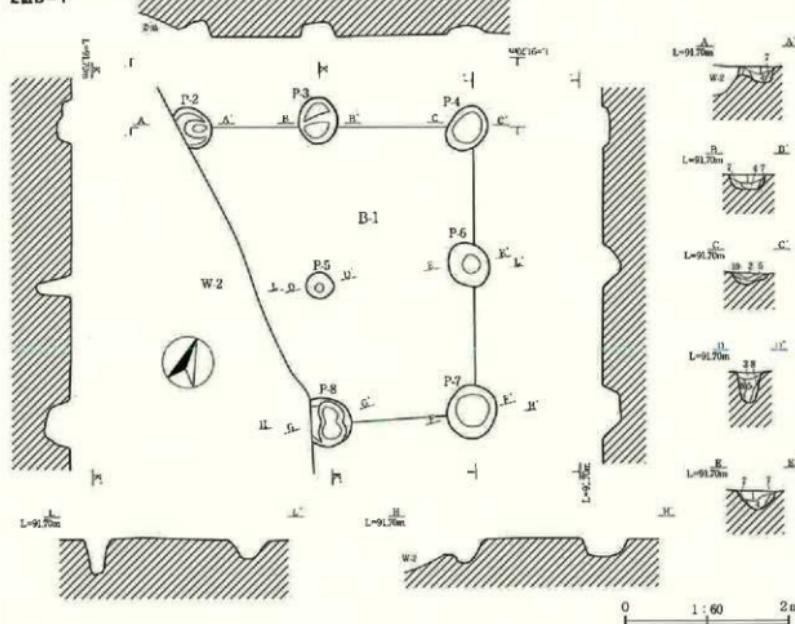


Fig.36 2区H-5号住跡・B-1号掘立柱建跡

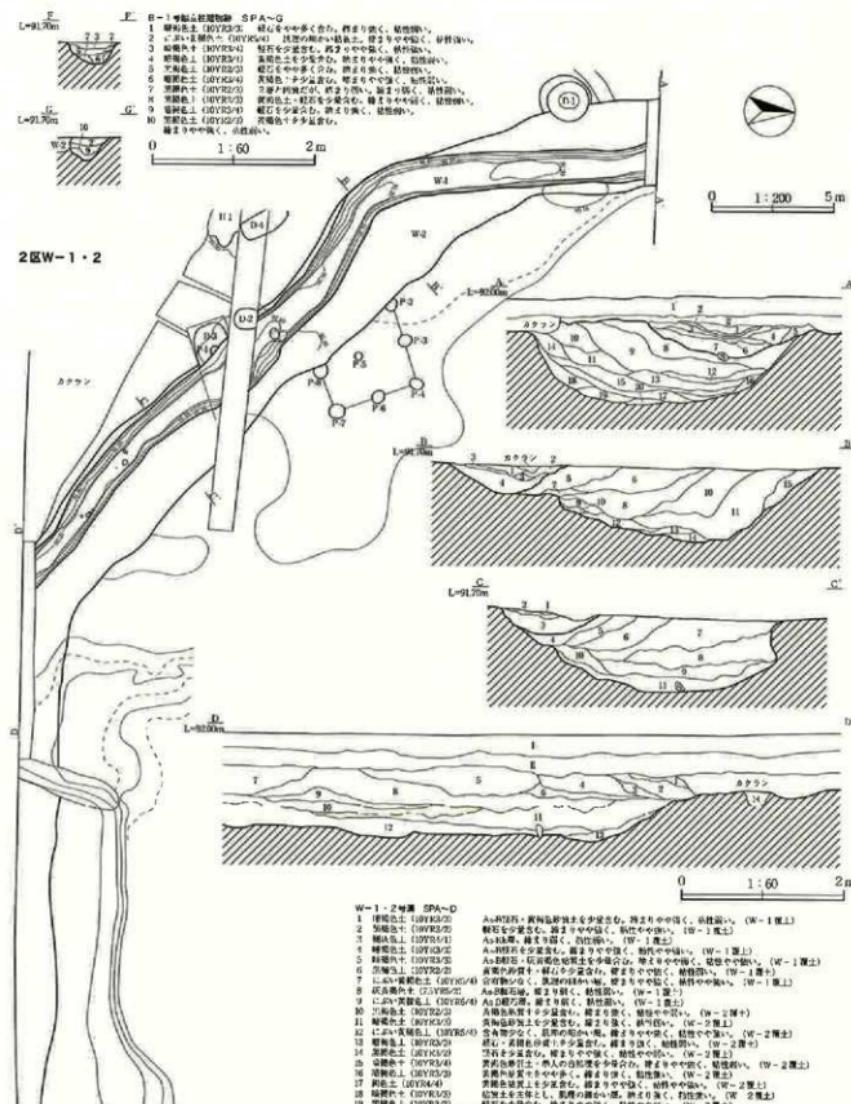
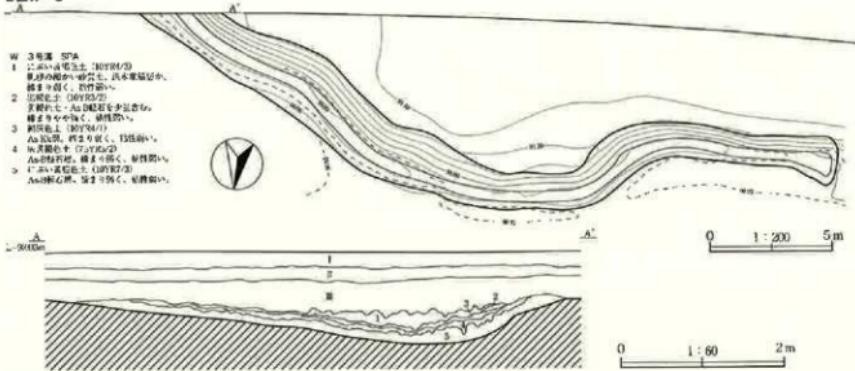
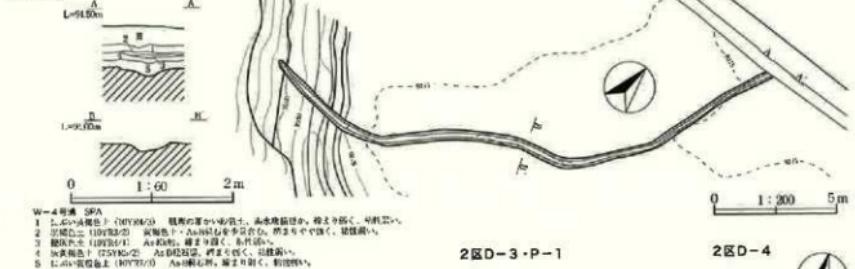


Fig.37 2区B-1号柱立柱建物跡、W-1・2号溝

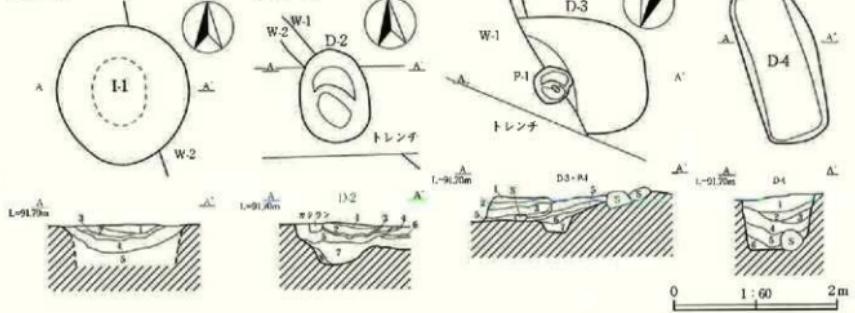
2区W-3



2区W-4



2区I-1

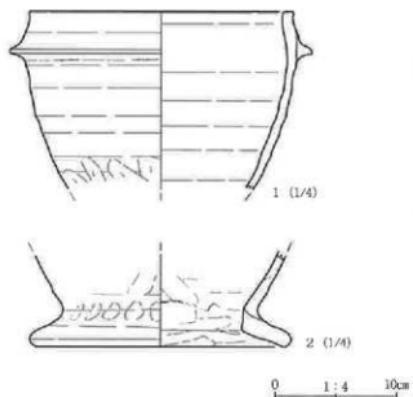


3号北深 SPA

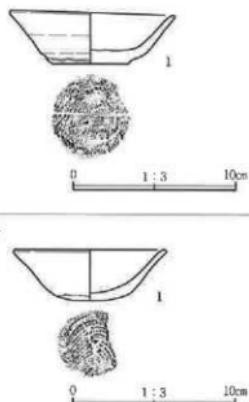
1. 基岩土 (D02D-1) 含む物少なく重複層の砂岩層。層よりやや薄く、粒状ない。
2. 沼澤土 (D02D-2) 含む物を含むか。層よりやや薄く、粒状ない。
3. 沼澤土 (D02D-3) As-A砂岩。層よりやや薄く、粒状ない。
4. 沼澤土 (D02D-4) As-A砂岩。層よりやや薄く、粒状ない。
5. 沼澤土 (D02D-5) As-A砂岩。層よりやや薄く、粒状ない。
6. 沼澤土 (D02D-6) As-A砂岩。層よりやや薄く、粒状ない。
- D-4号深 SPA
1. 基岩土 (D01D-4) As-A砂岩。層よりやや薄く、粒状ない。
2. 沼澤土 (D01D-5) As-A砂岩。層よりやや薄く、粒状ない。
3. 沼澤土 (D01D-6) As-A砂岩。層よりやや薄く、粒状ない。
4. 沼澤土 (D01D-7) As-A砂岩。層よりやや薄く、粒状ない。
5. 沼澤土 (D01D-8) As-A砂岩。層よりやや薄く、粒状ない。
- 0 1:60 2m
- 0 1:60 2m
- 0 1:60 2m
- 0 1:60 2m

Fig.38 2区W-3・4号井、I-1号井戸、D-2～4号土坑、P-1号ビット

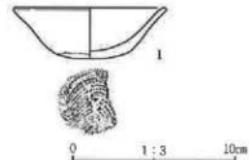
2区H-1



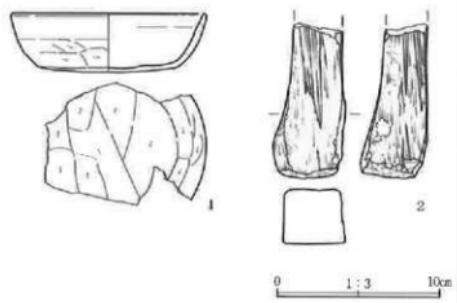
2区W-2



2区D-4



2区H-2



2区道横外

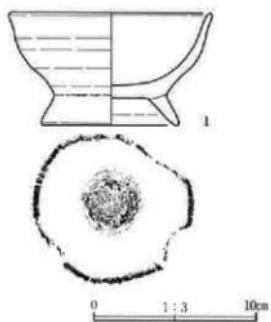


Fig.39 2区出土遺物

VI 朝倉伊勢西No.1 遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

朝倉伊勢西No.1 遺跡（群馬県前橋市朝倉町）は、狹義の前橋台地上に形成された微高地から後背湿地にかけて立地する。本遺跡の発掘調査では、9～10世紀木墳の集落であることが確認されているほか、住居跡より古いと考えられる溝跡も検出されている。また、これらの遺構が検出された地点の東側には、相対的に低所となる区域（以下、低地部）の広がりが認められている。

本報告では、浅間Bテフラ（新井, 1979; 以下、As-B）降灰直前の低地部における土地利用（稲作の可能性）の検討を目的として、植物珪酸体分析を実施した。

1 試料

試料は、調査区東側の低地部の2箇所（1地点、2地点）より採取した土壤試料である。以下に、土壤試料を採取した各地点の堆積層の観察所見を記す。また、模式柱状図を図1に示す。

（1）1地点

1地点は、調査区北東隅の調査区壁の堆積層である。本地点は、調査区の施工上の関係から、壁面に段が設けられていたため、観察範囲は堆積層の最下部から壁面の段差の深度約110cmまでを対象としている。本地点の堆積層の最下部は、灰色砂混じりシルト（層厚約8cm以上）からなる。当堆積物の上部は、暗色化し植物遺体等が混じる黒色シルト（層厚約9cm）である。黒色シルト上位は、灰色および黒色シルトからなる葉理構造を有する泥層（層厚約1cm）、炭化物層（層厚約2～3mm）を挟む灰～褐灰色のシルト～粘土からなる葉理構造を有する泥層（層厚約17cm）が堆積する。なお、後者の泥層の上部は、やや腐植質であり、淡く茶褐色を呈する。灰～褐灰色泥の上位は、成層したAs-B（層厚約22cm）が堆積し、フォールユニットの最上部にはAs-B上部テフラに含まれる、あるいは浅間鉢川テフラ（As-Kk; 早田, 1991, 2004）と称される、灰色の細粒火山灰も観察された。As-B上位は、黒色シルト（層厚約1cm）、葉理構造を有する灰色シルト（層厚5cm）および灰白色シルト（層厚約1cm）、側方に連続する偽理化した極細粒砂（層厚約1cm）、灰色極細粒砂混じりシルト（層厚約14cm）が堆積する。さらに、上位は、管状酸化鉄が発達する軽石混じりの黒灰色シルト（層厚約13cm）、および管状酸化鉄が発達する灰色シルト（層厚約19cm）がそれぞれ不整合に堆積する。

（2）2地点

2地点は、調査区の低地部中央付近に相当する北壁の堆積層である。観察範囲は、1地点と同様に、堆積層の最下部から壁面の段差までに相当する（深度約92cm）。本地点の堆積層最下部は、植物遺体や灰色シルトの偽理が混じる黒～黒灰色シルト（層厚約6cm以上）からなる。黒～黒灰色シルト上位は、炭化物層（層厚約1mm程度）が挟む灰白色シルトを最下部とし、葉理構造を有する灰～褐灰色シルト～粘土（層厚約24cm）からなる泥層が堆積する。灰～褐灰色泥層の上位は、成層し

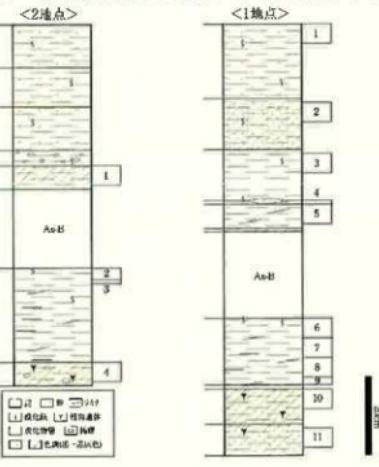


図1 調査区北壁(1・2地点)の模式柱状図および試料採取位置

た As-B (層厚約 20cm)、黒色シルト (層厚約 6cm) が堆積する。黒色シルト上位は、1 地点の黒色シルト上位に認められた灰色シルト、灰白色シルト、極細粒砂等の偽構 (亜円～亜角錐状、最大径約 5cm) が混じる灰色極細粒砂混じりシルト (層厚約 4cm) が堆積する。灰色極細粒砂混じりシルト上位は、蛭石混じり灰色シルト (層厚約 32cm) が不整合に堆積する。なお、灰色シルトは、蛭石の混入の程度および斑状の発達により、区分される。

今回の分析では、上述した分析目的を踏まえ、1 地点および 2 地点のそれぞれ As-B 直下の堆積層より採取した土壤試料 2 点 (1 地点 試料番号 6、2 地点 試料番号 2) を対象に、植物珪酸体分析を実施する。

2 分析方法

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタンクスチレン酸ナトリウム、比重 2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃縮する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作成する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体) や、および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体) を、近藤 (2010) の分類を参考に同定・計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物 1gあたりの植物珪酸体含量 (同定した数を堆積物 1gあたりの個数に換算) を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100 個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸め (100 単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、植物珪酸体含量を図示する。

3 結果

結果を表 1、図 2 に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔 (溶食痕) が認められる。以下に、各地点の産状を記す。

(1) 1 地点

1 地点の灰～褐色泥層の最上部 (試料番号 6) の植物珪酸体含量は約 20 万個/g である。ヨシ属の含量が最も高く、メダケ属 (ネザサ節) を含むタケ科、ススキ属を含むウシクサ族等が検出される。栽培植物では、イネ属が検出される。その含量は、短細胞珪酸体が約 100 個/g、機動細胞珪酸体が約 300 個/g である。

(2) 2 地点

2 地点の灰～褐色泥層の最上部 (試料番号 2) の植物珪酸体含量は、1 地点よりも低く、約 8,000 個/g である。検出された分類群では、ヨシ属の含量が高く、メダケ属 (ネザサ節) を含むタケ科、ススキ属を含むウシクサ

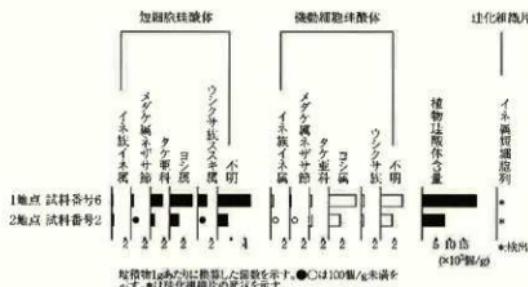


図2. 植物珪酸体含量

族等も認められる。栽培植物では、1地点と同様にイネ属が検出される。その含量は、短細胞珪酸体が約300個/g、機動細胞珪酸体が100個/g未満である。

なお、2試料中には、植物珪酸体の他に珪藻化石も数多く認められた。分析処理の過程で小型の珪藻や殻の薄い珪藻は消失したと考えられるが、確認された珪藻化石には低湿地に見られる分類群が多く、流水域に生育する分類群はほとんど認められなかった。

4 考察

調査区東側の低地部のAs-B直下の灰～褐灰色泥層最上部の植物珪酸体含量は、地点間で多寡があるものの、いずれもヨシ属の含量が高いという特徴を示した。また、試料中に認められた珪藻化石には、流水域の環境を示す分類群はほとんど認められず、沼澤地等に認められる分類群が多く確認された。

As-B直下の堆積層は、葉理構造を有する泥を基質とする堆積物であったことから、河川等の氾濫や増水に伴う堆積物等の累重が考えられる。また、やや腐植質な堆積物や炭化物層の薄層が挟在する様子も確認されたことから、As-B直下の泥を基質とする堆積物の形成された期間には、碎屑物が供給された時期と、碎屑物の供給のない比較的安定した時期とがあったと推定される。さらに、今回の分析結果を考慮すると、低地部は、河川の氾濫や増水の影響を受けやすい環境にあり、潤滑な場所を好みヨシ属が生育する湿地のような状態であったと考えられる。

なお、1地点および2地点の各試料からは、栽培植物のイネ属が検出された。その含量は、短細胞珪酸体が約100～300個/g、機動細胞珪酸体が100個/g未満～300個/gであった。水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（機動細胞由来）が試料1g当たり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている（杉山2000）。上記した判断基準を目安とすると、今回の試料におけるイネ属の含量は極めて低いことから、As-B直下灰岩前頭の低地部において稲作が行われていた可能性は低い。おそらく、隣接地や集水域における稲作やイネの植物体の利用を示していると推定される。

また、2試料からは、ヨシ属や栽培植物のイネ属のほかに、ネザサ節やスキ属には間けて乾いた場所に生育する分類群を含むネザサ節やスキ属も検出された。これらは、低地部から住居跡等が検出された微高地等に生育したイネ科植物に由来すると考えられる。

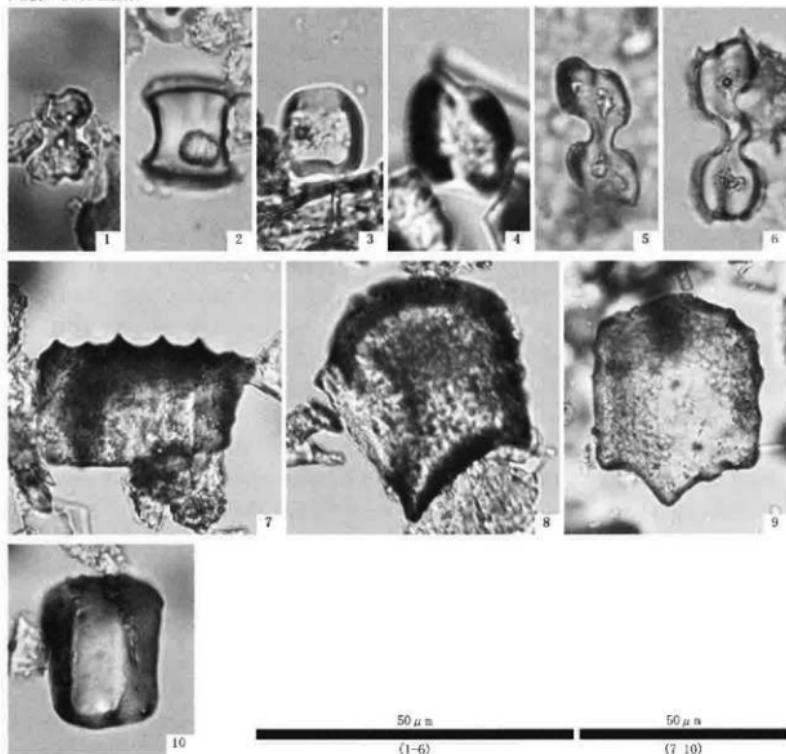
引用文献

- 新井房夫, 1979. 関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層. 考古学ジャーナル, 157, 41-62.
- 近藤錬三, 2010. プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会, 387p.
- 早田 駿, 1991. 浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, No.53, 2-7.
- 早田 駿, 2004. 火山灰編年学からみた浅間火山の噴火史 - とくに平安時代の噴火について. かみつけの里博物館第12回特別展 1108 浅間火山, 中世への胎動 45-56.
- 杉山真二, 2000. 植物珪酸体（プラント・オパール）による試験一郎（編著）考古学と自然科学3 考古学と植物学. 同成社, 189-213.

表1. 植物珪酸体含量

	1地点 kg/g	2地点 kg/g
分類群	6	2
イネ族イネ属	100	300
メダケ属ネザサ節	300	<100
タケ科	1,700	600
ヨシ属	3,300	1,300
ウシクサ族スキ属	1,300	<100
不明	4,800	1,500
イネ科茎葉及根細胞珪酸体		
イネ族イネ属	300	<100
メダケ属ネザサ節	100	<100
タケ科	300	400
ヨシ属	4,000	1,700
ウシクサ族	300	300
不明	3,100	1,700
合計	11,500	3,800
イネ科茎葉及根細胞珪酸体	8,300	4,200
植物珪酸体含量	19,800	8,000
珪化組織片		
イネ科根細胞胞壁	*	*
珪化組織片 *抽出		

図版1 植物珪酸体



1. イネ属短細胞珪酸体(2地点;2)
2. ネズサ節短細胞珪酸体(1地点;6)
3. ヨシ属短細胞珪酸体(1地点;6)
4. ヨシ属短細胞珪酸体(2地点;2)
5. ススキ属短細胞珪酸体(1地点;6)
6. ススキ属短細胞珪酸体(2地点;2)
7. ネズサ節機動細胞珪酸体(2地点;2)
8. ヨシ属機動細胞珪酸体(1地点;6)
9. ヨシ属機動細胞珪酸体(2地点;2)
10. ウシクサ族機動細胞珪酸体(2地点;2)

VII まとめ

今回の発掘調査により、1・2区を合わせて堅穴住居跡24軒、掘立柱建物1棟、溝18条、井戸2基等を検出した。また、1区から2区中央へ展開する居住域としての微高地と、2区東側の低所となる区域の広がりを確認した。ここでは本調査で確認した遺構を概観し、主要な遺構等については個別に検討を行ない、まとめとしたい。

1 調査の成果

本調査においては、弥生時代以前に該当する遺構・遺物は検出しなかった。この様相は、周囲の遺跡においても土器片が散発的に見られる程度のよう、まとまった形での遺構・遺物の検出例はなく、本遺跡もその例外ではないものと考えられる。続く古墳時代については、遺物として両調査区の表土層および住居跡・溝等の遺構覆土から散発的に埴輪小片が数点出土したのみであり、後述する溝群の所属時期が不明瞭な点があるものの、確実に古墳時代に属する遺構の検出には至らなかった。

古代の遺構としては、本遺跡で検出した遺構のほぼ全てがこの時期に該当するものと思われる。1区の堅穴住居跡は9世紀後半～10世紀代を中心として展開しており、一部は11世紀まで継続する。2区の堅穴住居跡については、後世の擾乱等の影響により住居跡の全容が明らかなものはないが、少数の出土遺物から鑑みると1区と同様に9世紀～10世紀の年代を想定でき、本遺跡に展開する集落の主要年代を示している。これらの住居跡の主軸方向は一部例外もあるが、概ね9世紀代の住居跡がN-84°-E、10世紀代の住居跡はN-79°-E、11世紀以降にはN-90°-Eの平均値を持つことから、それぞれの時期毎にある程度の主軸方向の指向性が看取できる結果となっている。竈については基本的に東壁に設置されるが、唯一の例外として1区II-14号住居跡のみが南壁に竈を作り付けている。また、本調査で検出した堅穴住居跡の中で特筆されるものは1区II-15・19号住居跡であり、「V 遺構と遺物」でも詳細を記したように残存状況の良好な炭化材や焼土塊が多く出土しており、「焼失住居」と目されるものである。これについては別に検討を行なうこととする。

また、本調査では古代に属すると思われる溝を多数検出しており、両調査区を合わせて18条の検出に至っている。18条検出した溝の内訳は、1区14条・2区4条であり、特に1区では東西方向の溝と南北方向の溝が重なり合い、網の目状の溝群を呈している。この1区の14条の溝は、南北方向に走る溝が先行し、東西方向に走行するやや規模の大きい溝が後出すると思われる。なかでもW-11・12号溝は、幅2.3～2.8m・深さ0.8～0.9mと規模や走行方向が類似しており、また覆土の状況から埋没時期もほぼ同時と考えることができ、両遺構が併存していたことが示唆される。これら溝群の時期については、覆土の上に堅穴住居跡が認められることを確認しており、重複関係からは若干の時期差はあるが概ね9世紀代を下限とすることが妥当のように思われる。上限についてはW-11号溝の最下層から円筒埴輪の小破片が出土しているものの、後世の流入も十分に考えられ、本調査では時期の特定には至らなかった。なお、遺構の性格については本遺跡周辺に広がるであろう水田等の生産域への給水路の可能性も考えられるが、現状では不明とせざるを得ず、今後の周辺での調査事例の追加を待って、改めて検討を要する。

2区で検出した溝についてはW-2号溝以外は、覆土中にAs-B軽石の一次堆積層およびAs-Kk軽石が良好に堆積しており、埋没時期が12世紀初頭(1108年)と特定できるものである。W-2号溝については個別の遺構名称を付しているが、「V 遺構と遺物」でも記したように、W-1号溝と同一の遺構となり埋没段階での時期差を示している可能性も考えられる。なお、覆土の土質は1区W-11・12号溝の覆土に類似した暗褐色砂質～粘質シルトを主体としており、調査区外北側において湾曲し、いざれかと合流する可能性もある。

2 「焼失住居」について

ここでは1区H-15・19号住居跡で確認した「焼失住居」について概観し、若干の検討を行ないたい。

豊穴住居跡から炭化材・焼土等が検出される事例については、早くは大川清氏や寺沢薰氏らによって、分類・火災要因の考察が試みられ（大川1954、寺沢1979）、全国的にも発掘調査による遺跡ごとの焼失住居の分析が進められた。その中で、石野博信氏が集成・類型化を試み、火災要因についての論及を行なっている（石野1990）。この論考では、石野氏自身が「類型化と意義が先行したことと、資料収集の不十分さ」に課題があるとしながらも、弥生時代から平安時代にかけての火災住居を集成している。これらの火災住居の炭化材・焼土・遺物の出土状況等を基準として類型の設定を行ない、そこで設定した各火災類型の意義について検討する。その結果として火災要因について、失火・放火（忌避的放火・住居の焼却・戰火）・飛火（類焼）等の3パターンを推定し、火災要因と各火災類型との関連性について推察されている。また、集落内での火災住居の在り方についても論及されており、火災住居について考えるうえで、重要な視点を喚起しているものと言える。

また、群馬県内では石守見氏が復元住居を用いた焼失実験を行なっており（石守1995・2001）、土葺き屋根の住居で炭化材が放射状に遺存する事実を明らかにするとともに、住居の焼失過程についても詳細に観察・分析されている。以下では、石野・石守両氏の論考を参考として、本遺跡で検出したH-15・19号住居跡の焼失住居についての、若干の検討を行なっていく。

H-15号住居跡は、住居地際を中心として炭化材が遺存する状況を確認した。また、住居全体に亘り焼土が分布している状況も見受けられる。特に住居北側での炭化材の広がりが顕著であり、角材・丸材・板材と思われる炭化材を検出している。出土状況としては、残存状態の良好な箇所を見ると、角材・丸材を上位とし下に板材が、これらの中間および床面直上には葉・茅穂と思われる炭化材が認められる。出土状況から角材・丸材は柱・垂木等の一部であると思われ（ほぞ穴と思われる加工痕が残る部材も含む）、下層から出土した板材については、壁材の可能性が考えられる。葉・茅穂について、石野氏は「特定することは意外に難しい」と断りながらも、炭化材の間からの出土は葺代、最下層の床面直上からの出土は敷物と考えられることが多いとしており、ここでは氏の見解に従っておきたい。

次に土器等の生活痕跡に伴う遺物の出土状況についてであるが、石野氏は出土量の多い住居跡を「日常用具を運び出すゆとりがなかった火災」、出土量の少ない住居跡については「日常用具を運び出した後の焼失」としている。この点を勘案すると、II-15号住居跡の遺物は実測遺物として6点、破片資料を合わせて200点弱（未接合資料含む）の遺物が出土しており、本遺跡の住居跡出土遺物としては相対的に多いものとなっている。また、窓の残存状況は良好であり両袖石および天井石が架けられたまま検出している。さらには完存の土釜が竈に掛けられた状態で出土している。これらの出土状況から、窓については当時の使用状態のまま残存しているものと思われる。

上述のような出土遺物・竈の残存状況を鑑みると、土器の持ち出しは想定できず、突発的な火災に遭ったための緊急的な非難の様相を窺うことができる。これは炭化材・焼土等が住居の床面直上から層的に堆積しており、床面と炭化物の間に埋没土が見られないことからも、住居の使用停止から焼失までの間に時間差が無かったこと



1区H-15号住居跡 ほぞ穴と思われる炭化材

を証左するものと考えられる。また、本遺構の火災要因としては、石野氏の分類される放火（忌避的放火・住居の焼却・戰火）の痕跡は認められず、また周辺での同時期の焼失住居を本調査では確認していないことから、現段階では飛火（頬焼）の可能性も低いように考えられ、ここでは失火の可能性を指摘しておきたい。大火場所については火災専門家等による検証を経るべきであろうが、炭化材の遺存が少ない住居南西側付近が火元になる可能性が高いように思われる。

なお、失火後の消火活動・片付けについては、石守氏の実験・分析によると、消火がなされなければ建築材の燃え過ぎとなり、ほとんどの建築材が灰になってしまうため、「どこかで消火しなければ典型的な焼失住家は出現しなくなる」とされており、本遺跡の焼失住居に関しても同様である可能性も考えられる。しかしながら、炭化材の良好な遺存や、住居ベルトの土層断面の観察から安定した埋没過程を想定できるため、これらの行為については現状では可能性を指摘するに留めておきたい。

II-19号住居跡については、H-15号住居跡と同様に床面直上に遺存状態の良好な炭化材・焼土が堆積する。炭化材は角材・丸材を中心に、藁・茅類と思われるものも含み、出土した炭化材の構成としてはH-15号住居跡と同様である。しかしながら、その出土状況はH-15号住居跡との相違点を挙げることができる。H-15号住居跡が住居壁際を中心に炭化材の遺存が見られるのに対し、H-19号住居跡の炭化材・焼土はほぼ住居全面に認められるものの、特に残りの良好なものについては住居壁際には少なく、住居中央に多いといった偏りをもって遺存する。炭化材以外の出土遺物は図示した羽釜のほか、須恵器壺・壺、土師器壺・壺、灰釉陶器等が挙げられ、出土量も本調査地内での住居跡に比べると相対的に多いことから、火災要因についてはH-15号住居跡と同様に失火を推定しておく。失火場所は上述のように住居中央に残存状態の良好な炭化材の分布が偏在することから、竈刷辺（竈についてはH-17号住居跡により削平される）ないしは住居周縁部と考えられる。なお、遺構の出土遺物および重複関係から、H-15号住居跡より古い時期を想定でき、それぞれの間での飛火（頬焼）関係はないものと思われる。失火後の消火活動・片付けについては、後世の削平により住居上面の削平が強く、遺構確認面で既に炭化材の散布が認められるほどで、覆土の堆積については不明瞭であるが、炭化材の良好な遺存から見ると、II-15号住居跡と同様にこれらの行為はなされなかったものと考えられる。

以上、本調査で検出した2軒の「焼失住居」について既存の研究事例によりながら概観したが、(1) いずれの住居跡についても火災要因は突発的な火災であり、(2) 要因としては失火の可能性が高いものと思われる。また、(3) それぞれの住居間には時期差があることから飛火（頬焼）関係はないものと思われ、本調査地での集落内火災は一時期に1軒であったと推定できる。この3点を本調査で検出した焼失住居の特徴として指摘することができよう。

3 遺跡周辺の土地環境について

本調査では、集落の展開する微高地（1区～2区中央）と、東側の低所となる区域（2区中央から東側、以下低地部と表す）の広がりを確認した。低地部には浅間日テフラの良好な堆積が見られ、一部では浅間柏川テフラの堆積も確認できた。特に浅間Bテフラは、これまでの研究により天仁元（1108年）に浅間山が噴火した際に上野国を中心に降下したものとされ、「国内の田畠が壞滅状態（『中右記』）」となった。この火山灰により埋没した水田が所謂 As-B 下水田跡である。本遺跡の周辺は明瞭な条里地割の残る地域であり、特に本遺跡南の北関東自動車道および関連の発掘調査により、As-B 下水田跡の検出例が増加し、それに伴い発掘調査により検出した水田跡を基にした面的な条里地割の検討がなされるようになっている（神宮・前田 2010 ほか）。ここでは、本遺跡で確認した低地部の土地環境について触れてみたい。

本遺跡の試掘調査段階で、この低地部・As-B 粘土の堆積を確認しており、As-B 下水田跡の検出が想定された。

しかしながら、本調査においてAs-B軽石を除去すると、褐～褐色粘質土を基盤とする上層の広がりを確認した。この層は一般的に見られる水田跡七壤と様相を異にし、伴う畦畔の検出にも至らなかった。のことから、水田跡である可能性は低くなり、当時の土地利用（稻作の可能性）の検討を目的として、自然化学分析を実施した。主とした植物珪酸体分析の詳細・結果については「VI 自然科学分析」に記されているが、ヨシ属の含量が高く流水域の環境を示す分類群はほとんど認められないとから、低地部の土地環境は沼沢地等であったと推定されている。さらにAs-B軽石直下の堆積層は、稟理構造を有する泥を基質とする堆積物であり、河川等の氾濫や増水に伴う堆積物等の無重である可能性も指摘されている。今回の分析結果・遺構の検出状況から総合的に考慮すると、低地部は河川の影響を被りやすい環境で、湿潤な場所を好むヨシ属が生育する湿地のような状態と判断でき、水田の經營の可能性は極めて低いものである。なお、集落の展開する微高地と低地部の境界には、畦畔状の高まりが巡る。断ち割りでの断面観察から、盛土ではなく地山を削っての成形を確認している。当初は水田に伴うものかと思われたが、上述のように低地部は水田面の可能性がきわめて低いことから、この高まりの性格については明らかではないため、現状では微高地と低地部を画するための一施設として評価しておきたい。

本調査で検出したこの低地部については、東の広瀬川右岸の自然堤防に沿って南東方向に伸びると想定される低地部の一部に当たると思われる。これらの状況と条里地割の不明瞭な部分に当たること等を合わせて考慮すると、木道跡東側に走る低地部には水田跡の展開する可能性は低く、湿地が広がっていたものと考えられる。しかしながら、上述したように木道跡以南には明瞭な条里地割が認められ、木道跡は微高地に展開する集落の南端に当たり、今後の調査で木道跡南側において集落域と生産域との明瞭な境界が確認されることが予見される。

4 結

今回の調査では微高地際に展開する集落の在り方やAs-B軽石降下前の土地環境の在り方についての一端が明らかとなった。上述したように、木道跡以南は県内でも水田遺構の調査事例が多い地域であり、今後の調査事例の蓄積により集落域と生産域を含めた土地利用について、明確になることが期待される。

最後ではあるが、厳しい寒さ、また、3月11日に発生した東日本大震災により、社会的にも不安定となる中で調査に従事された作業員の方々、さらに現地調査・整理作業・報告書作成に御指導、御協力頂いた方々に感謝の意を記し、結びとしたい。

〈引用・参考文献〉

- 新井 仁 2001「群馬県における平安時代の水田開発について・前橋台地南部を中心とした試論・」『研究紀要』19 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 新井 仁 2008「条里地割導入後の水田と集落の一様相・前橋台地南部地域を中心として・」『研究紀要』26 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 飯島義雄 2010「浅間Bテフラ直下水田の総合的再検討に向けての予察・プラント・オパール分析による放棄時期の問題提起を受けて・」『研究紀要』28 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石野博信 1990「第五章 火災住居跡の課題」『日本原始・古代住居の研究』 吉川弘文館
- 大川 清 1954「豊穴焼土考」『安房勝山子台遺跡』 千葉県教育委員会
- 石守 晃 1995「復元住居を用いた焼失実験の成果について」『研究紀要』12 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

- 石守 晃 1999 「豎穴住居と豎穴住居遺構に就いて - 多比良追都野遺跡の古墳時代後期の豎穴住居をサンプルとして - 」『研究紀要』17 財團法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石守 晃 2001 「復元住居を用いた焼失実験再び」『研究紀要』19 財團法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石守 晃 2003 「焼失実験と関東北部の焼失住居」『考古学ジャーナル』
- かみつけの里博物館編 2004 第12回特別展図録『1108・浅間山噴火・中世への胎動』かみつけの里博物館
- 工楽普通 1991 「水田の考古学」UP考古学選書12 東京大学出版会
- 小峰 篤・吉沢 貴 2001 「山王若宮II遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 齊藤英敏 2003 「水田跡研究の新視点 - 群馬県における水田跡理解の現状 - 」『考古学研究』第50巻第2号
考古学研究会
- 坂口 一・三浦京子 1986 「奈良・平安時代の土器の編年・住居の重複と共伴関係による土器型式組列の検討 - 」『群馬県史研究』24 群馬県史編さん委員会
- 坂口好孝・佐藤則和 1997 「宮地中川遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 神宮 啓・前田和昭 2010 「南部撲点地区遺跡群No.4」前橋市教育委員会
- 高橋 亨・神宮 啓 2007 「馬場東矢次遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 高橋 学 1989 「埋没水田遺構の地形環境分析」『第四紀研究』第27巻第四号 日本第四紀学会
- 高山 剛・小峰 篤・井上唯雄 2003 「史跡 八幡山古墳」前橋市教育委員会
- 田中 雄 2002 「群馬県条里制研究資料の収集と課題」『研究紀要』20 財團法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 寺沢 黒 1979 「火災住居覚書 - 大阪府錦音寺山遺跡復元化後の火災によせて - 」『青陵』40号 横原考古学研究所
- 外山政子 1989 「群馬県地域の土師器値について」『研究紀要』6 財團法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 能登 健 1983 「群馬県下における埋没田畠調査の現状と課題 - 火山災害史への考古学的アプローチ - 」『群馬県史研究』17 群馬県史編さん委員会
- 広瀬和雄 1996 「条里制」『考古学による日本歴史 16・自然環境と文化 - 』雄山閣
- 松下 勝 1989 「水田遺構と自然科学」『第四紀研究』第27巻第四号 日本第四紀学会
- 三浦京子・黒沢はるみ 1989 「平安時代の煮沸土器について - 土釜とは何か - 」『研究紀要』6 財團法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 横倉興一 1986 「上野国府周辺における条里構造の問題点」『条里制研究』2 条里制研究会
- 横倉興一 2000 「概説 古代の水田・畠」『新編高崎市史』資料編2 原始・古代II 高崎市史編さん委員会
- 横倉興一・田村 孝 2003 「浅間山の噴火と古代水田」『新編高崎市史』通史編1 高崎市史編さん委員会

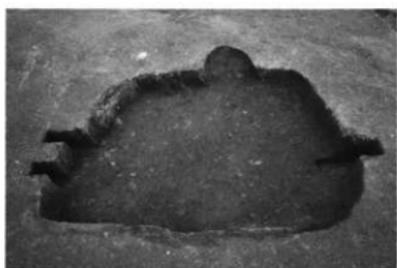
写 真 図 版



1区 H-1号住居跡 全景（西から）



1区 H-1号住居跡竪 全景（西から）



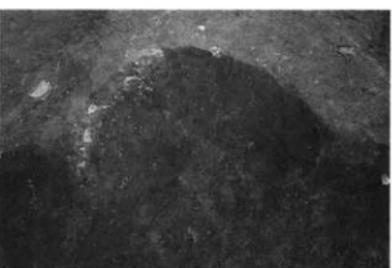
1区 H-2号住居跡 全景（西から）



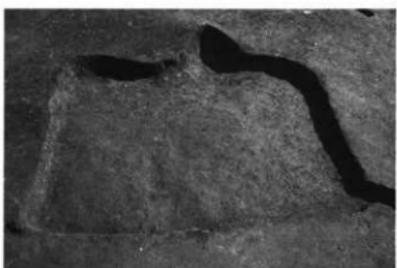
1区 H-2号住居跡竪 全景（西から）



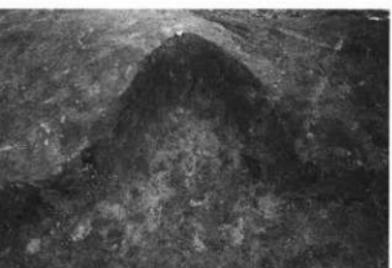
1区 H-3号住居跡 全景（西から）



1区 H-3号住居跡竪 全景（西から）



1区 H-4号住居跡 全景（西から）



1区 H-4号住居跡竪 全景（西から）



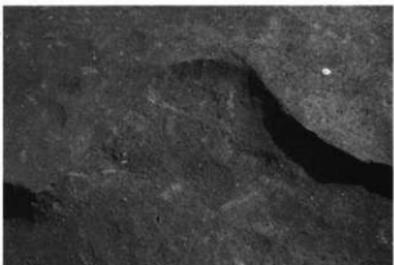
1区 H-5号住居跡 全景（西から）



1区 H-5号住居跡竪 全景（西から）



1区 H-6号住居跡 全景（西から）



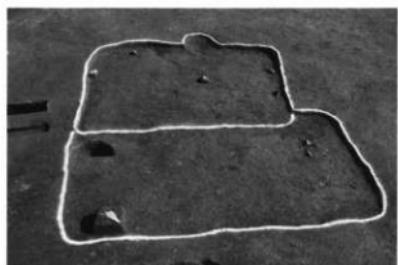
1区 H-6号住居跡竪 全景（西から）



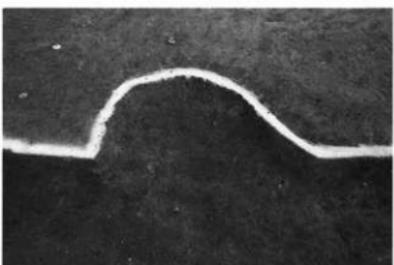
1区 H-7号住居跡 全景（西から）



1区 H-7号住居跡竪 全景（西から）



1区 H-8・12号住居跡 全景（西から）



1区 H-8号住居跡竪 全景（西から）



1区 H-9・13号住居跡 全景（西から）



1区 H-10号住居跡 全景（西から）



1区 H-10号住居跡 全景（西から）



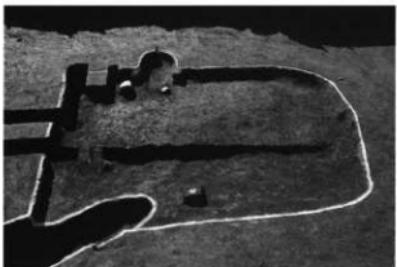
1区 H-11号住居跡 全景（西から）



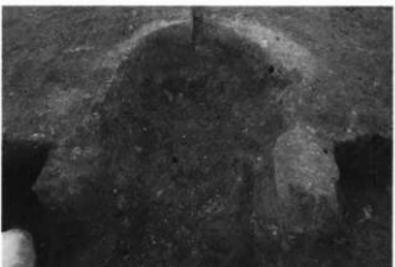
1区 H-11号住居跡 全景（西から）



1区 H-13号住居跡 遺物出土状況（西から）



1区 H-14号住居跡 全景（北から）



1区 H-14号住居跡 全景（北から）



1区 H-15号住居跡 全景（西から）



1区 H-15号住居跡 罹物出土状況（南から）



1区 H-15号住居跡 罹物出土状況（西から）



1区 H-15号住居跡 炭化材検出状況（北西から）



1区 H-16号住居跡 全景（西から）



1区 H-16号住居跡 全景（西から）



1区 H-17・19号住居跡 全景（西から）



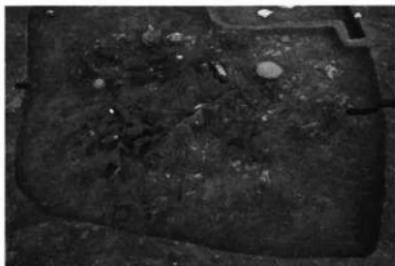
1区 H-17号住居跡 全景（南西から）



1区 H-18号住居跡 全景（西から）



1区 H-18号住居跡遺全景（西から）



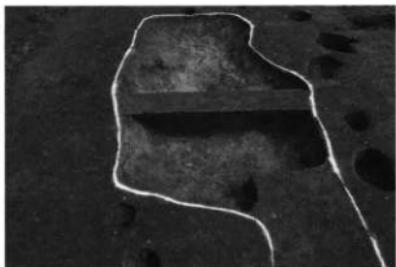
1区 H-19号住居跡 炭化材出土状況（西から）



1区 H-19号住居跡 遺物出土状況（南から）



1区 溝群 全景（南西から）



1区 W-3号溝 全景（西から）



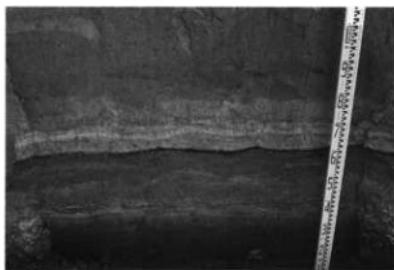
1区 調査風景



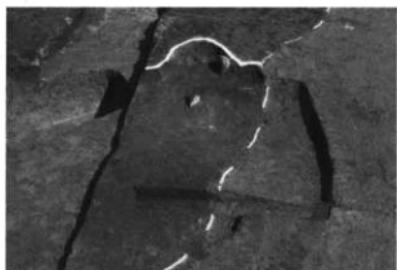
朝倉小学校遺跡見学会



2区 調査区近景（東から）



2区 基本層序B



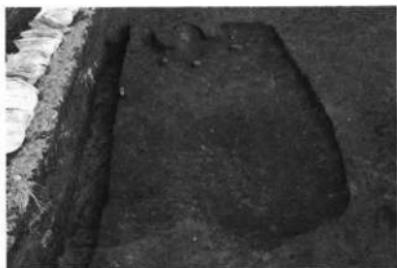
2区 H-1号住居跡 全景（西から）



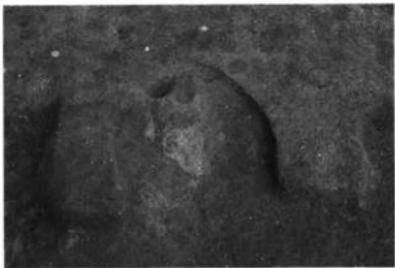
2区 H-1号住居跡 全景（西から）



2区 H-1号住居跡 遺物出土状況（西から）



2区 H-2号住居跡 全景（西から）



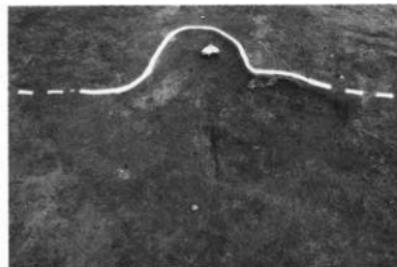
2区 H-2号住居跡竪 全景（西から）



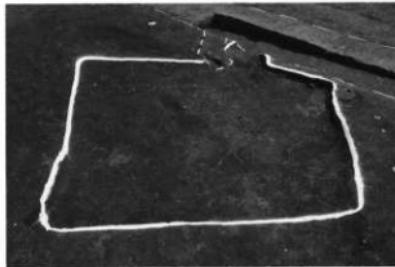
2区 H-3号住居跡 全景（西から）



2区 H-3号住居跡竪 全景（西から）



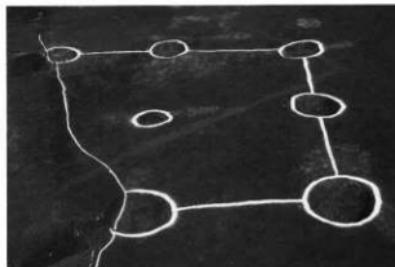
2区 H-4号住居跡 全景（西から）



2区 H-5号住居跡 全景（西から）



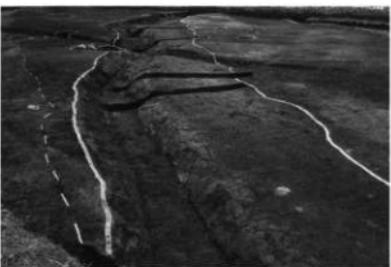
2区 H-5号住居跡竪 全景（西から）



2区 B-1号掘立柱建物跡 全景（南から）



2区 W-1号溝 全景（南から）



2区 W-2号溝 全景（南から）



2区 W-1・2号溝 SPA（南から）



2区 W-4号溝 全景（南から）



2区 W-4号溝 SPA（南から）



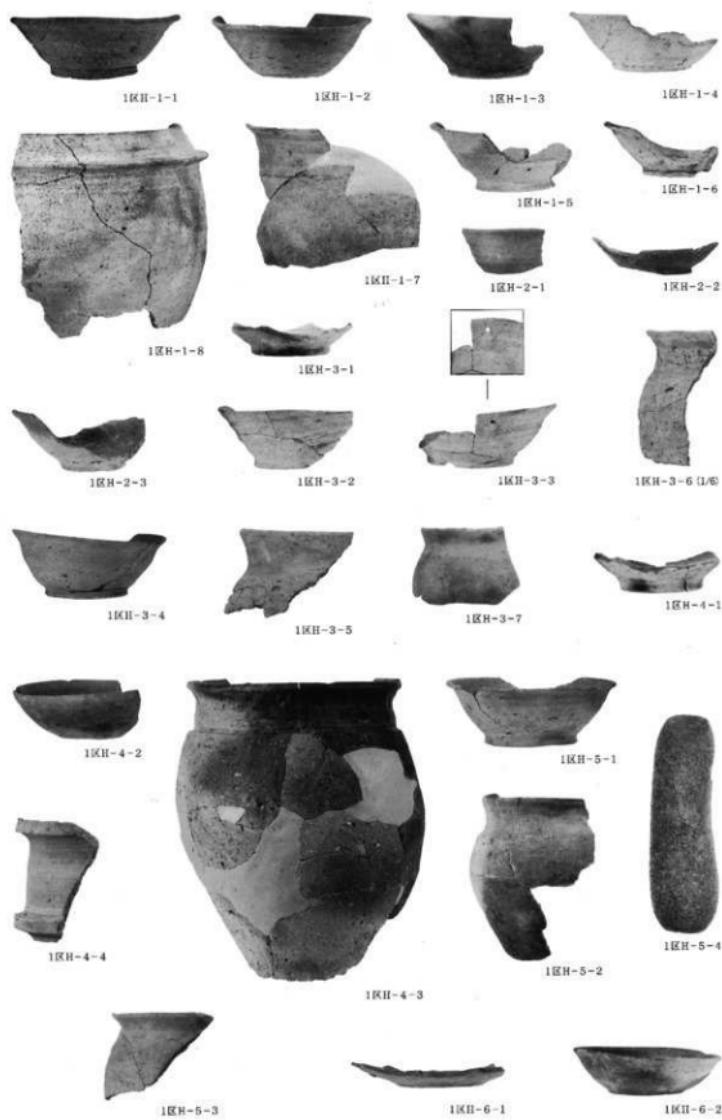
2区 I-1号井戸 SPA（南から）

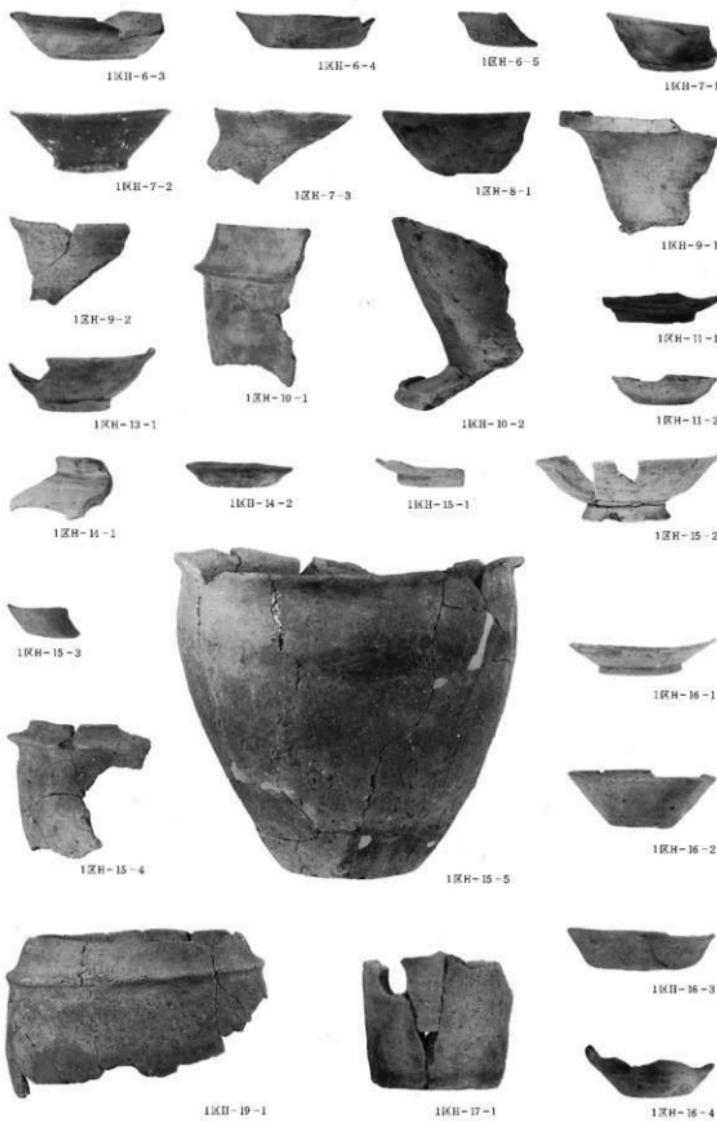


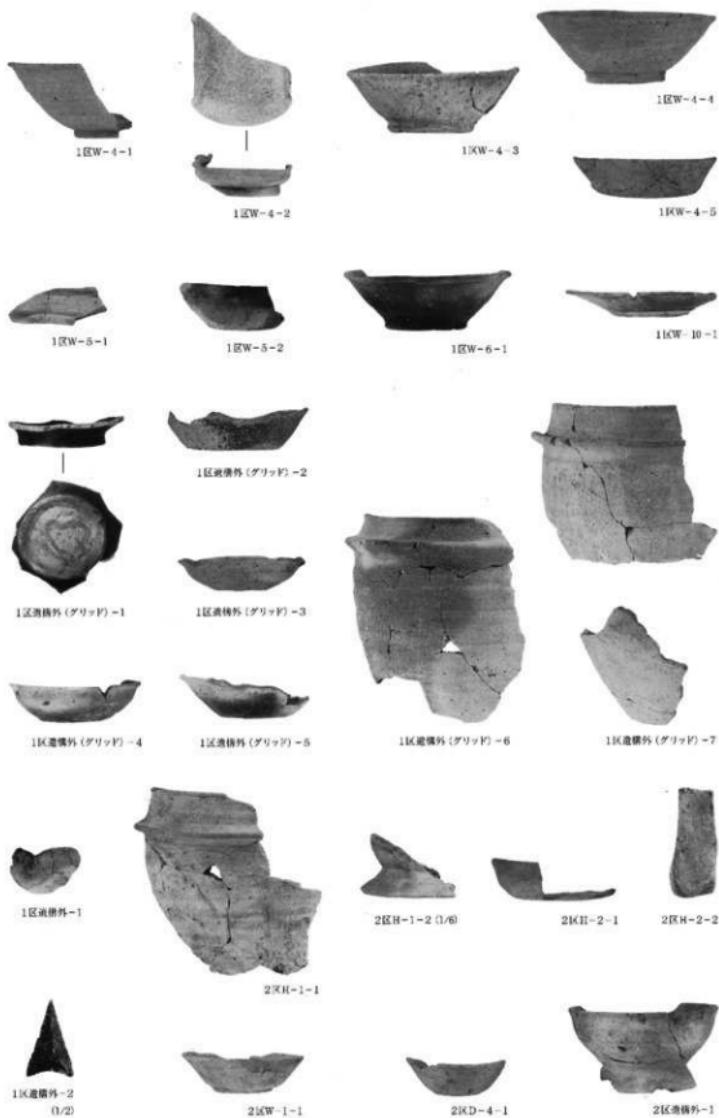
2区 調査風景



2区 調査風景







報告書抄録

フリガナ	アサクリアイセニシNo.1イセキ							
書名	朝倉伊勢西No.1遺跡							
副書名	(都)江田天川大島線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	-							
シリーズ名	-							
シリーズ番号	-							
著者名	橋田實之・山田誠司							
編集機関	技研測量設計株式会社							
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町1-15-3							
発行機関	前橋市教育委員会							
発行機関所在地	〒371-0018 群馬県前橋市三保町2-10-2							
発行年月日	2011年10月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	位置	調査期間	調査面積	調査原因		
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				北緯	東経
朝倉伊勢西No.1遺跡	前橋市明倫町 147, 159, 160番	10201	22C71	36°21'50"	139°05'51"	2010.12.24 2011.03.15	(都)江田天川大島線道路改良工事	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物	特記事項			
朝倉伊勢西No.1遺跡	集落 その他	奈良・平安時代	住居跡 掘立柱建物跡 溝 井戸 土坑 ピット	24軒 1棟 18条 2基 12基 67LJ	土師壺 須恵器 灰陶陶器 石製品 銅製品 かわらけ 他	「焼失住居」2軒		

朝倉伊勢西 No.1 遺跡

(都)江田天川大島線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011年10月21日 印刷

2011年10月31日 発行

発行

前橋市教育委員会文化財保護課

〒371-0018 群馬県前橋市三保町2-10-2

TEL (027)231-9531

編集

技研測量設計株式会社

印刷

朝日印刷工業株式会社

